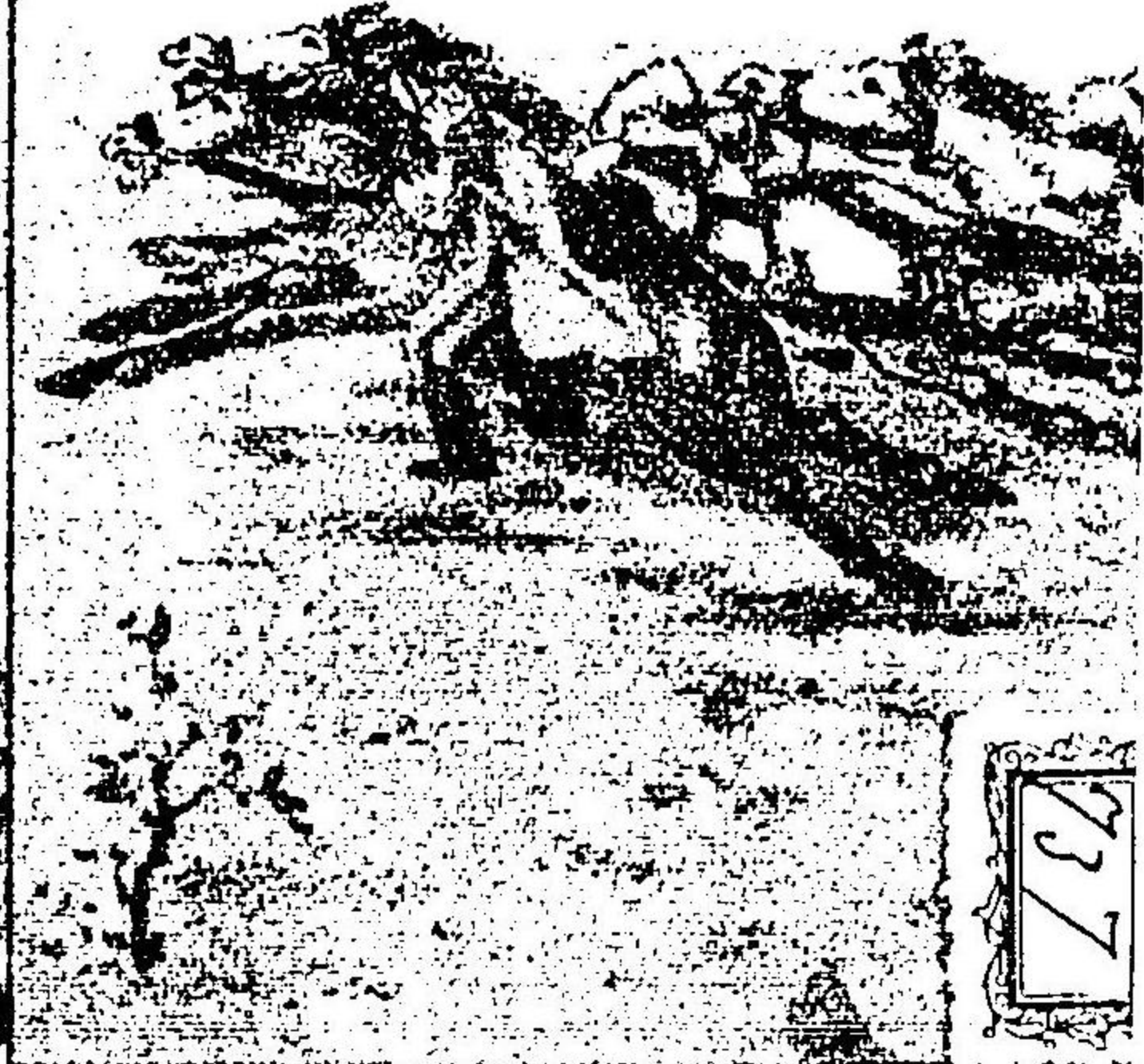


學 生 必 唱

軍 歌 集



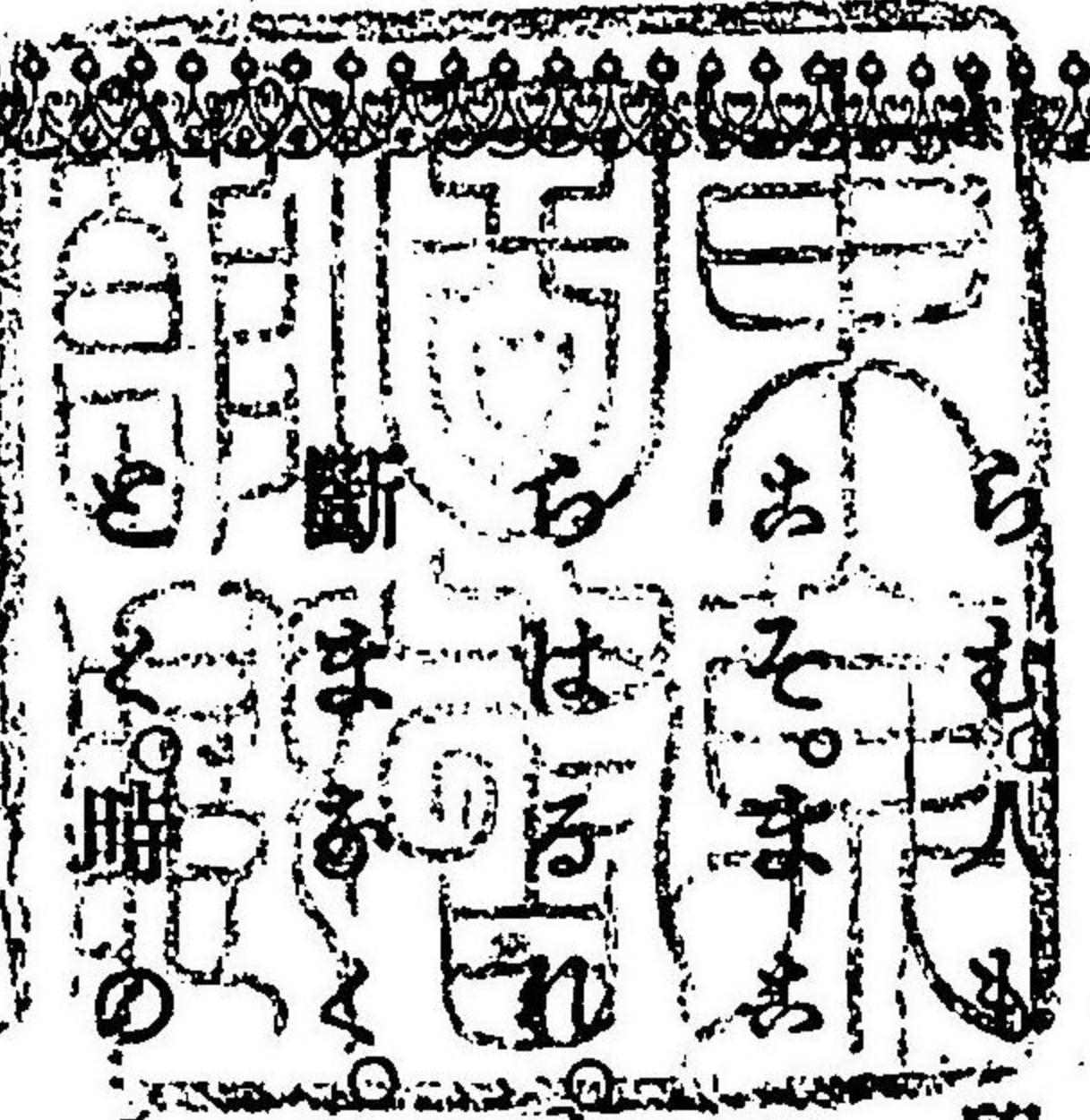
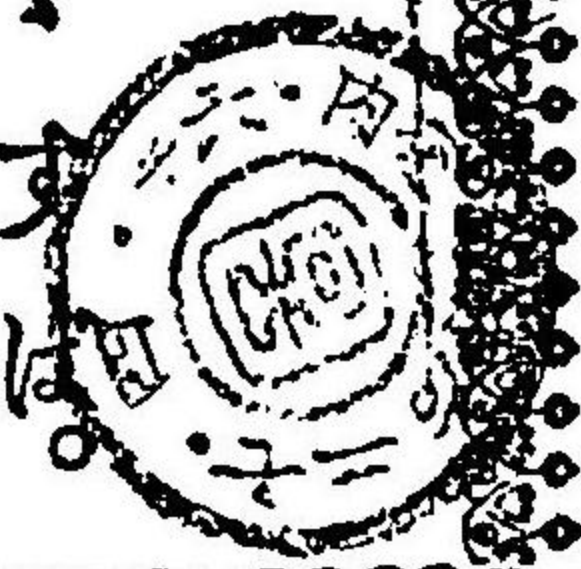
單騎遠征之歌
 郡司大尉
 千島探檢
 之歌



27

皇后宮御製唱歌

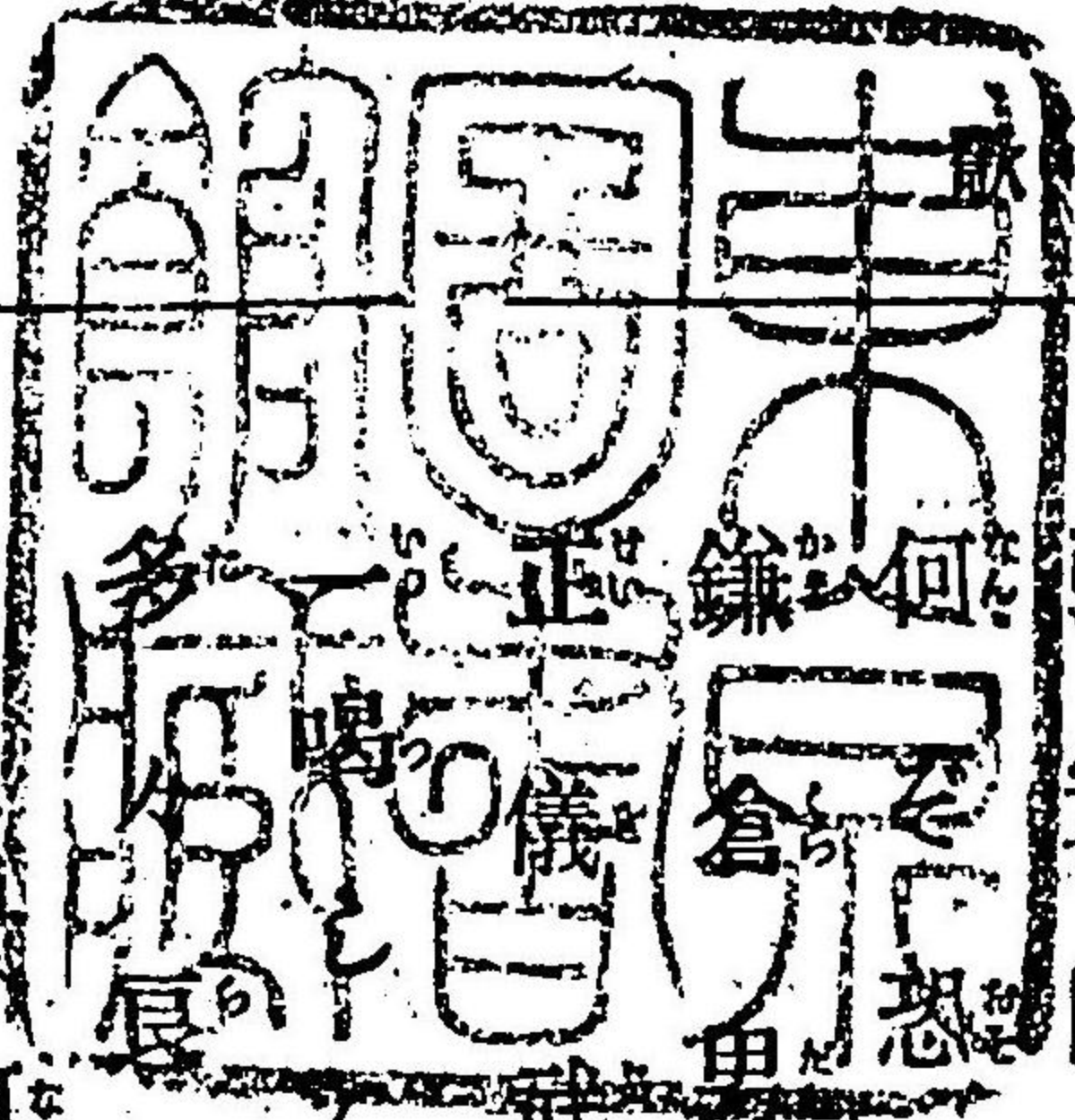
金剛石も。みがく。すは。珠のひかりは。そはち



らむ。人。も。學。び。て。後。よ。あ。そ。ま。あ。と。の。徳。は。あ。ち。は。る。け。時。計。の。針。の。断。ま。あ。く。め。く。る。か。あ。と。の。時。の。ま。の。日。か。け。を。し。み。て。は。げ。み。あ。ば。い。か。あ。る。業。か。な。ら。さ。ら。む。水。は。う。つ。は。に。し。た。が。ひ。て。そ。の。さ。ま。く。

元寇の歌

元寇の歌



元寇の歌
 四百餘洲を擧る
 十萬餘騎の敵
 國難茲に見る
 弘安四年夏の頃
 鎌倉を我に
 正儀武断の名
 多岐の濱邊の夷
 そは蒙古の勢
 傲慢無禮者
 共に天を戴かず
 出でや進て忠義に
 鍛へし我が腕あ
 此處ぞ國の爲め

に。なりぬなり。人は
 まじはる。友により。よ
 さにあしさに。うつる
 なり。おのれよまさる。
 よき友を。あらひもと
 めて。もろとも。お
 るの駒に。むちうちて。
 まるびの道に。すゝめ
 かし。

歌の冠元

日本刀試し見ん
心ろ鏡紫の海に
浪押わけてゆく
丈夫武雄の身
仇討歸あすば
死して護國の鬼と
誓い箱崎の
神ぞ知るしめす
やまと魂潔よし
天は怒りて海は
逆まく大浪に
國に仇をなす
十餘万の蒙古勢
底の藻屑と消へて
残るはたゞ三人
何日か雲はれて

歌の冠元

福島中佐

福島中佐

玄海灘月清よし

福島中佐單騎遠征の歌

第一章 黒川真頼

人は驚く旅路あり
人は危ぶむ旅路なり
過ぎ行く路は數千里
とけ行く路は未開の地
人の恐るく西比利亞の
道ひとり行く旅ごるも
かゝる境に思ひたつ
福島少佐の雄々しさよ
君伯林をいづるとき
駒よ打乗り言ひけらく
成ると成らぬのふた道を
其ひと道は死ぬるのみ
去らほと言てうつ鞭の

音こそみゝに留まれど
行方も知らずしら雲に
影だに見えず白くもに

第二章

ゆけど果なき沙漠の地
人げまれかりひろ野原
わくれと盡きすいほへ山
鳥も聲せぬ峰つゞき
過ぎ行路はおうじうの
ますら夫も知らぬ道
踏分けおえて恙なく
キヤクダに着くそ勇まとき
事なと了へぬ去らはとて
てる日の本に歸るきみ
高きいさを、較ふれば
烏拉の山も麓なり

轟ろく浪に較ぶれば
イルテス河は音もなし
語つたへむ万世に
書に傳へむ万代に
郡司大尉千島探檢の歌

竹の家主人

清き流れの隅田川
艤装立てし六隻の
短艇は井びてとき出せり
其指揮官を誰となす
千島開拓熱心者
郡司大尉と知られけり
渺茫ひそき大平洋
海上二千の舟路をば
短艇に波を蹴つてゆく
如何に愉快の壯圖をや

郡司大尉

千島は我國北門の
鎖鑰のみかは其他よ
魚介の遺利の多かるに
密獵船は出沒し
士民はおれに苦めり
何時まで棄ておかるべき
大尉は彼に漕ぎ行て
占守島をば根據とし
潮流急なるペーリング
堅氷漂ふオコツク海
島の周圍をめぐ廻り
沖の島嶼經營し
開拓殖民の計をあし
又新知のフロトシ灣
其灣口のかくれ礁
打碎きても船舶の

郡司大尉

郡司大尉

出入便利の港とと
北の堅めをなとつゝも
密獵船を追拂ひ
國の富源を殖す也
嗚呼勇ましの千島行
茲に國威を大丈夫が
命を的のあゝの壯舉
名も千載に傳らん

祝_ニ福島中佐單騎遠征歸
京_ニ歌 小中村義家

福島中佐

舞へよ謠へよあゝの席
祝よ飲よあゝの御酒を
阿爾泰おろし寒日も
蒙古の月のさゆる夜も
進め進め駒のたつかみ
たゞひとどり
嘶く聲に鞭擧げて

佐中島嗣

よしあ駒は驚ども
腰にどりはく日本刀
磨け磨け清き心
御國の爲め
死をかへり見ぬ丈夫の腸
岩根こゝろき八重山坂
降りおそき雪あられ
凌ぎくかへりけむ
君か譽れは御國のほまれ

けふのうたげは君がため
舞へよ謡へよあの席
視よ飲めよあの酒を

佐中島嗣

南朝 楠正成軍歌
忠臣

建武の昔し正成は
之はひとせ都せめ
下迄給し給言なり
我免に角になるならハ
秘慮を惱し給ふこと
さわ去りなから正行よ
忠義の道わ兼てしる
家名を汚す事なかれ
あわれみ扶助し隠家の
月の桂はさいなみや
旗を再び翻へし
秘慮を安んし奉れ

○楠正行

呼鳴正成よ正成よ

肌を守りを取いだし
ありし其時帝より
之を汝に與ふなり
世わ尊氏の世となりて
鏡にかけて見ることぞ
父の子なれば流石にも
弓張屏の影暗く
打渡されし郎黨を
吉野の山の奥ふかく
流れも清き菊水の
敵を千里に逐のけて
嗚呼秘慮を安んし奉れ

公の逝去のこのかたは

黒雲四方にふさがりて
悪徒わ天下を横こらし
慢どりはて、上とせず
たもる間のなき戦争に
芳野の山にはなみんと
君が御代、千代―と
いづれの時に、なるや
嗚呼大君の御ために
この世の塵を洗はんと
遠くあなたを見渡せば
雲のうへまで屹立つし
見ゆる、菊水其旗は
父の賜ひしこの、及
賊の頭らをきらんため
くへの仇なり父のあだ
はらへば來たる夏のは
つらく―思ひぐらせは
若しも病にれかされて

月日も爲にひかりなく
下を虚げ上をさへ
吹きくるかせは、腥く
春をくれども花さかず
訪ひくる人は、へてなく
さへづる鳥の聲さくは
嘆かはしきの、至りなり
振ひ起りてけがれたる
する人どては、非ざるか
金剛山は、巍峨とし
繁れる林の木の間より
げにこそ國の、たかなり
腹をされとのため、ならず
憎さも憎し、彼賊等ら
きつて捨ず、に置べきか
頭は、正平、戊子のはる
元來よわき、此、からだ
空しく失せしこと、あはれ

不忠不孝ととしられん
死出、名残にいま一度
君の御影をふしおがみ
聞てせつなる胸のうち
書き残したる、梓ゆみ
ちかひし者は、百餘人
物ともすず、に斬まくり
討死せしは、いさぎよく
都も遠き、むら里の
忠臣孝子の、鑑みぞと
天地と共に、つたはらん

討死するは、このときぞ
願叶ひて、まのあたり
生て、これのみこと、のり
あわれといふ、思なり
引て、かへらぬ、赤心を
雲霞の、大軍を
さみの方、おぼ枕、して
勇しかりける、事共なり
女わらべに、至るまで
ほむる、其名は、香しく
天地と共に、つたはらん

◎正行の歌

かへらしとかねて
なさかすに、いる

思へ、の、梓ゆみ
名をぞ、留むる

今上天皇陛下

明治九年十二月十五日を以て從三位を追贈す

明治十年二月御巡幸の時行在所より勅便を正行朝臣の墓前に差遣され左の勅詔及び金幣を賜は

れり

贈従三位 橘朝臣 正行

汝正行父の志を継ぎ力を王事に盡し
遂に國難に斃る朕其世忠を追感す今
大和に幸するに因り使を遣し汝の基
を遺し且金幣を賜ふ

明治十年二月十七日

天皇
御璽

○楠母慈訓の歌

父の玉 <small>たま</small> ひし此 <small>こ</small> かたな	腹 <small>はら</small> を切 <small>き</small> とのをいせかや
父の殘 <small>のこ</small> せし其 <small>その</small> からだ	只々 <small>しじ</small> 死 <small>し</small> とはのたまはじ
ちの教 <small>せき</small> も有 <small>あ</small> るものを	君 <small>きみ</small> の御恩 <small>ごおん</small> をいかせん
身の悲 <small>かな</small> みにかきくれて	忠 <small>ちゆう</small> と孝 <small>かう</small> とを忘れじか
世 <small>よ</small> にながらへて國 <small>くに</small> のあた	打 <small>うち</small> しづめんと思 <small>おも</small> はずや
金剛山 <small>こんごうざん</small> の城 <small>しろ</small> あども	父 <small>ちち</small> か形身 <small>かたみ</small> と知るならば
命 <small>いのち</small> はなごか輕 <small>かる</small> からん	年 <small>とし</small> たけたらば菊水 <small>きくすい</small> の
旗 <small>はた</small> のかをりと家 <small>いへ</small> の名 <small>な</small> を	萬代 <small>ばんだい</small> 迄 <small>まで</small> に句 <small>ことば</small> はせて

人の鏡 <small>かがみ</small> となれよかし	あはれの者 <small>もの</small> や咽 <small>なみ</small> たる
母 <small>はは</small> が涙 <small>なみだ</small> は年 <small>とし</small> をへて	四條 <small>しじょう</small> 原 <small>の</small> の戦 <small>たたか</small> ひの花 <small>はな</small> の
露 <small>つゆ</small> ときゑにしも其名 <small>そのな</small>	ぞ今 <small>いま</small> にかんばしき

●忠孝の名譽外國迄に輝けり又紀念碑の裏面には時
の英國公使の文を左に

大日本帝國に於て信意を表す

楠正成 湊川戰陣の前此場所
に於て彼子息正行に訣別せ
り

大日本に於て

英國公使ハルリーエスパークス

千八百七十六年十一月

○楠櫻井之驛訣別の歌

正行 <small>まさゆき</small> ちが身 <small>み</small> の	露命 <small>つゆめい</small> もせまる今日 <small>けふ</small> あす
早くそなたに遺訓 <small>いくん</small> せん	人間 <small>にんげん</small> 七たひ生きかへり
ほろばしてや彼の賊等	平生 <small>へいせい</small> こゝろを動かさず

時に盡すい前ればぞて
利の爲め義をば缺して
累代子ろんめいつぎて
我今此世を去り行けば
世とはなるらん其時わ
れい民塗炭に苦しまん
つねに 帝を 術なし
南柯のゆめも空にせず
無爲の治世に爲にあり
因循姑息に爲さずして
をのれか一もん一族は
野心は決して起すまじ
系統正閏わきまへて
國家にそむく逆賊が
天の綱にはもれずして
先に立ぬわかうかいり
行末かならず忘るゝな
漢川さしてぞ行く

ちの教くに遠よなよ
ぬきいだしたる忠節を
をしき命ちも惜むまじ
りならず足利尊氏の
誰か敵慮をやすんせん
ろなたが親への孝行は
懐姦をほくへ退ぞけて
鶴與を都へかへらしめ
運をば天にまかせをさ
后の世までも名を殘せ
降るは云のあままし
未代かわらぬ大さみの
不義の富貴は求めまじ
榮耀榮花を極むとも
悪名千代になかへし
紀年に殘すことの業の
目ぞす荒浪いよたかく
死出の首途のくり言を

會得しつらん正つらも
もはや河内へ歸らんぞ
獻敬してわかれけり

○補正行出陣の歌

正平四年正行は
四條の隆資卿を経て
先臣正成勤王の
打滅ぼして先帝の
その後天下又亂だれ
都をさして攻上り
終に津の國兵庫なる
戦死をこそは遂たりき
其時正行漸やくに
軍の場へわ伴はで
敵を亡し我が君の
遺し訓へし言の葉は
然るに正行今は早や
今に及びて朝敵を

悲憤にたへぬふりにぞ
せきくる涙をしとめ

芳野の皇居に参内し
心の中をぞ奏しける
軍を起し朝敵を
敵慮を安め参らせし
逆臣尊氏つくしより
正成覺悟やさだめけん
湊河にていささよく
十一歳になりぬるを
河内へ送り歸しつゝ
御代になせよと細々に
今尙耳に留れりく
年もはたちと成ければ
打亡さすぞしなば

いつをか待ん人の身は
病の爲に死しもせば
父の爲には不幸なり
されば此度師直と
彼が頭を正行が
頭を彼に取らるるか
雌雄を定め申すべし
今度の軍正行が
今生にては今一度
申すも敢てなみだをば
義心氣色に見へたりぎ
天子御座をば掲げさせ
此程敗度の戦ひに
敵意を慰するに足せし
いさゝか安んじ待たさ
麻の如くに乱れさて
修羅の國靜いつの日か
その時亡父正成は

思ふに任せぬ習にて
君か爲にわ不思なり
手いき軍を仕り
手に打とるか正行が
二つの中に戦ひの
必死に覺悟に候へば
龍顏拜ませ玉わんと
鎧の袖にそゞぎつゝ
近く召されて正行よ
敵の勇氣は挫きしは
さるに程なく世の中
さきのまゝなる合戦場
しづまるべとも見ざり
これ玉の結も國にかけ

事なるなくば死すしと
とぎに正行十餘歳
今猶ほ記すくら井の
我初めより此身おは
死ぬるはいと易けり
いわでもしれし尊氏の
されば帝の御ゆく衛
是ど最後の遺憾そよ
河内の國に歸すなり
父が子なれはる斗の
どく／＼かへり此事を
いとねん頃に説き示
これぞ亡父の大君に
さるに此身わ不肖にて
空くなからへ生みのみ
父に取ては不孝の身
死ぬるはいとも易けれど
君の御身のいたましく

思ひ定めし事なるか
父の膝下にありけるが
驛にいましめ申すよふ
國にさゝぐる心ろゆへ
我若き死なば世の中は
掌にこそ答つべけれ
如何なり行き玉ふらん
依つて汝を伴なわで
汝乳兒といひながら
道理わどくに推し得ん
母にも篤と告ぐべしと
遂に河内にかへされき
報ひはんべる徴表かや
上下を安むる事もなく
醉生夢死のありさまぞ
君に取ては不忠の身
いと乱れし胸中も
父の遺訓のさりやらで

一日二夕日と云から入て

正行つらうと思ふよう

空しく時日打過ぎて

罪に罪ます不忠不義

されば空しくあらん

なりて土風を引起し

よりて今より出陣し

降く間に強賊を

黄金はな咲くみよしの

湧ける鼎も押しづめ

さわさり乍ら勝負は

まして此度の出陣は

一たび龍顔拜さんと

天機を動かし待ぬと

口にいのはねと心には

我死ならば君とくに

思ひせまりて計らすも

血汐の涙ばらうと

今日とこそなりにける

かゝる場合にありな

らじも病にたはれな

千悔萬悔かへるなし

むしろ國家の犠牲と

鬼籍に入るを本意な

龍虎破竹の勇をも

千里の野邊になぎた

静けき御代や南朝と

敬慮を安んじ奉らん

豫定なす可事ならず

安危決る時機なれば

斯は一とくうち連て

誠忠無二柱臣が

必死を期せし者から

如何なり行事ぞやと

一滴千金かへがた

鎧の袖にたきのせの

情の底はいかならん

傳奏未だ陣へざるに

憂を帯びる龍顔に

いとねん頃に宣はく

汝千辛萬苦もて

南風今に競ふなし

汝の罪にあらぬぞよ

安きを保ちながらふは

ざるに南風ふかざるを

今將いくさ出さんと

我亦これを思へども

ざるを一つの心より

残りし我身はいかに

我もとくより必死を

されど心の駒をどめ

長き月日のそがなかに

二たび南都の榮ふるを

汝一人をたのしとし

ろを大君も酌つるか

早玉だれの打まかせ

玉の涙もしたゝりつ

あな忠しんよ正行よ

南都を守護し來けるも

これ皆天の時にして

まして我身の今日に

これ皆汝の大功ぞ

いとも遺憾に思ひつゝ

いとたのしき事にして

天の命にはかちがたし

もしも場合に至りなば

正行よくくきね

期せしは今に幾回ぞ

忍てお字をしたいつゝ

よき時節もやあるらば

見得ともやありな

年月はた

心ならずも今に今
嗚つるならば急げ
心を長く身をたもち
いともしたしき君臣の
たがいにしほる袖袂
正行ついに拜辞して
奮撃突戦撓むなくし
されど象寡は敵なく
るはより乍らてん道は
邪道さかひて正道の
なごかある可様あらん
松や柏の世の中に
雪てふ苦をもへしぬび
四方の草木の時々に
清き操を抱くゆへ
忠義の鬼と成り行し
是れ人間の松柏ぞ
千萬年の今日に
いやはやくと生ける我心
いやしづくと押鎮め
民と國とを守れよと
誠どの情さけ打あけて
是ぞ此世の名殘かや
四條畷にはせむかい
必死を期して戦ひぬ
其身は遂に打ち行きぬ
順逆正邪明らけく
亡ぶることとき曲事の
見よや人々見よや見よ
たへらるゝは何故ぞ
霜たふ勢も溜みこえて
うつりなびくも願みぬ
されば身家を願みず
彼の正行の大人こそは
身は朽ち行くも英魂は
清く傳はるる菊水の

旗風どもにかんばじく
嗚呼皇國に生を棄け
かゝる心ぞもちたけれ
思へよ思へ男子たち
彼も人なり我も人

○補正行最後の歌

それ大孝は大忠ぞ
世を南朝に恢ふくし
心もかたき金剛ざん
宗徒わづかに數千人
赤心もつて楯となし
千挫萬せつ撓むなく
防ぎに禦ぎ防げども
正平四年も暮ゆきて
北風いたく吹すさび
時に正行いへるよう
正行不肖の身乍らも
死て捕縛の鬼となるも

句ひあるころ道理なれ
人と爲りうへからは
かゝる心ぞもちたけれ
勤め勵めや壯士ばら
優り劣りのあるべきや

父の遺訓を固く記し
民を塗炭に救はんこ
千窟の城にたて籠り
城へき僅にすう十丈
生血もつて弓矢とし
苦せん辛環叛意なく
守りに衛り守れども
わすかに餘す年の内
南風いつか吹やめて
いかに宗徒の人々を
かねて心に誓へるは
生て北都の奴たらずと

心を千々に碎きつゝ、
帝をやすんじ奉り
忠と孝とのふた道を
期せしも今は水の泡
北風日々にいやまして
あな口惜しや天の時
死べき時に死なざれば
古人のいひし其時機は
我又こゝに座しながら
假すも假さぬも天の時
死ぬも生けるも惟命を
されば今といさぎよく
聞けよ愛國義膽の士
あらゆる賊をなでめて
父子累代の勳こうわ
朕わ汝を股肱とす
王家の重きに任せんと
正行首を地につけて

宗徒必死の勇をかり
亡父の遺志を全ふし
果さんものと一心に
天道ついに許さずや
南風遂に競ふなし
あななさけなや天の命
死いやまさる辱ありと
我此時機をやいふなら
賊に後ろを見すべきや
成るも成らぬも天の命
命を知らぬは愚人のみ
最後の雌雄決すべし
思へ勤王悲憤の士
思ひを晴らす其時は
深くかんずる所なり
かならず命を全ふし
畏き詔とありければ
是を最後の参内と

思定めて退をきぬ

斯くて一族郎黨と
参りて御暇を申上げ
各らの名字を書つらぬ
兼て思へば梓弓なき
記し留むと鏃もて
芳野を出て勇ましく

後醍醐帝の御陵へ
如意輪堂の壁板に
又其奥にかへらじと
人数に入名をば
一首の歌を書き残し
四條の細手に向ける

○帝正行訣別の歌

頃は正平四のとし
櫻の花のそれならぬ
芳野の山の奥ふかく
行宮の庭にぬかづきの
亡父正成微身もて
一度賊をきりなびけ
是れ今日にあるどかし
宗徒一族打つれつ
遂に數萬の賊をつき
從横無盡に掛ちらし

正行一族うちつれて
今はいばらの花ぞ咲く
御座なし玉ふ大きみの
いと畏みて奏すらく
恩威を朽し奉り
先つ帝の厭慮をバ
いざ出陣と促がして
如意輪堂に名を留め
一離一合千變ばん化
はやは是迄と諸とらに

あはれ雄々しき英傑も

匹敵のあまのつみ

消てはかなき夢の世や

消てはかなき夢の世や

真如の月も雲に入り

無常の闇のいと暗く

無念無想を感ずらん

無念無想を感ずらん

さばさり乍ら英名は

小楠公とたとへられ

千年はたろか八千代迄

芳野の花と諸とも

いと芳ばしく句なり

いとかんばしく句なり

○曾原道實公

○曾原道實公

申も畏れ多き事乍ら

今天満宮と崇奉るは

實に菅原の右大臣

道實公は願敏詩歌にも

すぐれ玉ひ築道は

弘法大師や道風と共に

日本の三聖と世に稱

られ學識武術に至迄

達し玉ひじならん

當時藤原の時平は君の

名聖武いそくじかん

譏を構へてついに

院紫のたなる鳥守る

土民と共に永き月日を

送りふひしは實に

名君も時世に是非も

あらざらん其句に曰く

○可憐金銀

○可憐金銀

都の月筑紫のつき

月か一にして身は處を

異にす無情憐むべき

其情けに憐むべし

○桃太郎出陣の歌

○桃太郎出陣の歌

なんじよ汝桃太郎

早その島へ行ならば

ろのしま人を能なづけ

日本の徳くも蒙むらせ

しまの寶をとりかへり

天皇陛下にたてまつり

人にもみせて喜ばせ

汝のいとを顯はさば

我等もなんじの父母と

人によはるゝ事ならん

まよとに汝はきみに忠

まことなんじは親に孝

あらよろこば玄桃太郎

汝のころに記應せよ

我が日の本は神代より

いく百代の天皇の

御らる樂ゆる國なるぞ

さてその國の國たいは

能ある人をよくもちる

劣れる國をよくたすけ

神武天皇かみよより

請つぎませるはかり事

國をひろめて人をまし

月々ものをさかんに玄

人の誠のつとじべき

業のかざりを盡させん

千代に八千代に其先に

桃の花さき實をむすぶ

限なきまでさかへゆき

もしも其まに桃太郎

議員となれる事あらば
小なる事にぞねみおひ
國にたいして罪なるぞ
をさなきときは幼稚園
心の器量をだいに持ち
それをば互にせぬ物と
汝は目出度ものなるぞ

○明智左馬之助湖水渡りの歌

天をひたして底もなき
いさめるこまを丈夫は

琵琶の湖うみ渡らんと
水きはちかく乗出たり

比叡乃山より立のぼる
きらめく渡る水の面は
雲の如くにむれつとふ

朝日のかげの浦もせに
波かくす共思ほへず
敵も味方も音をのみて

うちぞまもれる丈夫も
神よまもれな我はいま
ともに死べき身と魂の

心に好運をぞ祈るなる
往もかへるもまもるも
まかせて君がなれば

頼む双手もけなげなれ
こころ后れて失にける
駒もいでこよもろ共に

項羽はほろび義なかは
かたき旅路に我あらば
ほまれの海のはか海か

生死の波をかきわけて
あなやうちこむ鞭風に
すぎて消ゆく岸邊には

いでや沈まむもろ共に
もる玉あわの花ふいさ
波うちかへす鳴のおと

沖にいつればひと羽の
嵐のさがかさりながら
あやしの四方の高峰

駒の立がみうつなみわ
後のであぞいやたかぎ
七重八重たつ黒雲もに

空かきくもり日わらく
やがて波間に鳥羽玉の
小島に通ふどりもなく

はや岸の音かすかなり
あやめもわかぬ閑なれや
こまの波かく音ばかり

見れば天地まふたつに

さく電光となるかみの

天統すてくますらの
雲の流れのおぬあらし

うなむを的に打くだす
むち取かわす間もなく

逆まく波に目もくれて
いでや死べし和田の
死ねや勇めと玉の緒も

あやうし駒もますらも
泡か露屑かもろとも
絶なむ手綱ひきしむる

さわれ海路のかたき程
風の浪きる頼ちうけて
世に此海を渡りかね

渡る心もいやたけく
こまは蹴たてし水烟り
うらみに死にし亡魂の

友ほしげにぞたち迷ふ
今わあなたの水ぎわに
れのがよはひを其君に

装をあふりのはらい行
つくやつかれし愛駒の
ゆづりて斃る砂の上に

あらしははれて丈夫の
比殿の山に出る月鏡み
雲井はるかに寫留けり

岸に飛び立つ面かけを
雲井はるかに寫し留けり

○源廷尉

我父いかにあわさぬか
伏見の里の雪のなか
始めて聞こそくやしけ
鞍馬の奥に人となり
興さん者とをさなぎに
心をくだき身をきたへ
眼をさらし氣をひそめ
家の白旗おし立て
鐵柵が峰さかおとし
めざす仇をほろぼして

○熊谷直實

抑も熊谷直實は
頼朝公の下臣にて
知勇兼備の大將と
左れば元暦元年の
功名ありし物語り
曉き健して熊谷は

我母いかに成り玉ふ
すぎし昔を人づてに
年は十二の春よりも
世に衰へし家の名を
夜はよもすがら兵法に
晝はひねもす文學に
月日づもりし其末は
平家の友を打なびけ
八島の海や楳のうら
今に其名はつたはれり

征夷將軍源の

羽東一の旗がしら
世にも知れし勇士なり
源平須摩の戦に
聞も中々哀れなり
敵の陣へと攻めいれは

平家方のむ者一騎
駒を浪間に乗り入れて
熊谷次郎直實は
互にしのきを削しが
はなも粧ふうす化粧
斯るやさしき出扮に
名乗給へど有ければ
我こそは參議經盛の
早々首を打れよと
梳石に猛き熊谷も
落る涙は止まらず
是非なく太刀を振揚て
首は前にと落にける
須摩の嵐に散にける
永く吊ひ申さんど
青葉の笛を取添へて
實に情ある武士の

沖なる船に後れじと
一町計りすゝみしを
扇を揚げて呼び戻し
見れば二八のねん顔に
涅齒黒々ぞ附け玉ひ
君は如何なる御方ぞ
下より御聲夾やかに
三男無官の敷盛ぞ
西にむかひて手を合す
我子の事まで思やり
鏡の袖に絞りつゝ
甫無阿彌陀佛諸共に
無殘や花の苔さへ
是を菩提の種として
仰なき體に言ひ遣し
八島の陣へと送りしは
心のうちぞ憐れなり

○平野國臣首月照

花の都もあさはなほ
名は流れたる清水や
秋の葉いろの晴どとに
乱れゆく世の浪花江や
猶世の爲に身をつくし
波影の岸の波ならぬ
いろは變らぬ青柳の
たゝの橋をば打渡り
萬世かけて君が代の
神に歩みを箱崎の
筆の主をよく問へば
御手を下しませり
かさねし白浪の
恨み浦半の片たすき
沾衣塚の濡ころも
やがて博多の假住居
又行く方は薩摩がた
心る細くも都にて

夕べ淋しき風情なり
落ち来る龍の乙音山
散や紅葉のちりく
藍のさきは繁くとも
盡さんどても筑紫海
操をいつかふが線り
驛路を越て香推綱
千代の松原千代かけて
千歳の松によそへつゝ
社にかけし四つの文字
延喜の帝畏しこくも
爰もむかしは石疊み
よせし昔を忘れしと
かけて歎くも憐れなり
吾身に着たる心地せり
こゝも浪風さはがしく
沖の小島にあらねども
雖かあばれと思あらん

たよるはこゝろ筑紫淵
語ふひともうさ枕
せき留られて又ふねに
浪にゆられて行先に
頓て鹿兒島かこの島
又風におどろきて
日の神無月聖の夜の
照り輝きてくもりなき
茲に一人の薩摩人
契りも深き船の中
乗合人ももふね人も
さりとば知らぬ白浪の
猶東雲のあけがらと

○見島高德

我國まもるる武士の
朝日にはほふ山櫻
右近の花にかせ吹かば
葵とり直し守るべき

一人の外に打あけて
野間の關屋のせき守に
乗るも夫れと寄がたき
黒の瀬戸てふ名もうち
翼を縮めて潜みしが
日向を差して船出せし
傾く月と諸とも
身は大君の御爲とて
如何なる縁し先の世に
底の藻屑となりぬるを
擡の甲も露ほども
立さわげ共甲斐どなき
なくより外はなかり

大和心を人間は
咲やかすみも九重の
守れや一武士の
櫻は忠義の花なるぞ

其色其香たへなるも
花散る事はなきぞかし
聖帝の大御代と
櫻花こそ愛たけれ
夜る行宮に忍び入り
あか心を黒染の
世にも稀なる忠烈は
去れば今尙武士が
三郎ととき忠臣を
帝に仇する者あらず
忠義の劍ふりかざし
國平らけく安らけく
廣き世界に輝がし
千万春を迎へんと
我武士の忠烈は

○蒙古戦歌

正義をまもる我國は
四百餘州と云ばいへ

藝浮の風にさとはれて
千春萬春動かざる
共に世界に倒しなき
昔し兒島の三郎は
十字の詩をも作りなし
花と其香を競ひける
鬼神とても泣かんめり
花見る庵にいにしえの
美みしたひ慷慨し
國に敵する者あらば
只一打に切倒し
聖帝の御威徳を
櫻の花ともろどもに
やたけ心のいやませる
櫻と共にためししな

天地に耻る所なし
十萬餘騎と云ばいへ

正義はつれし彼の夷
油断をなさず打守る
宵の星のきらめきぬ
首を擧げて眺むばれ

何の恐るゝ事やある
武士の鎧に露おきて
太刀のこじりる輝きぬ
伊勢の神路に月暈々

●伊勢難

いでや刀の切れ味を
木の葉の如き舟に乗
宛船ちかく進みつゝ
那がる元のゑみし等を
立ちたる様の勇しさ
血盤の露に光りさし

試みるべき時ぞかし
山なき浪を押去切て
櫓つてにりのうつり
斬りなびけつゝ眩に
鋒のはさきに結ほるゝ
多々良濱邊に月朧々

○玄海難

嗚呼天怒り海あれて
ゑみしが船を敷へる
其上あゆみ渡るべし
我日の本の武士が
其場まぢかく漕よせて
心地もよげに打笑ひ

狂ひさか巻く大浪に
浮べるかはね十餘万
嵐退ぞき浪なきて
磯の小船の楫をとり
此體たらく打見やり
時しも東のやま出て

玄海洋上月變々

○紀念碑

静に思ひめぐらせば
昇る朝日の旗の手に
獅子を切せる大旗や
寄くる事のあるならば
群がり立て打はらい
振ひ起れよ人こゝろ
博多の濠空晴れて

我が大君の此御代は
振ひ起れりひと心
鷲を畫ける大旗の
昇る朝日の旗の手に
昔のひとに劣らしと
心の光り君見すや
紀念碑頭に月圓々

○大村益次郎

人と生れて來からわ
二つともなき身の果は
見事に物わできるとも
よつばと心に盡さねば
いつ迄ながらへ生る共
むつかじそらな顔をして
捕公さんのいさをしも
八ッの惠比すの首切て

忠と孝とに死ぬがよい
極めて大事にするがよい
偽り一つはないがよい
賊のみち立てにくい
鷄鷄狸々ぢや詮がない
人にはなれぬ不忠もの
爲して爲さぬ事はない
九重の意をばやすめ

さゝもかしこも天皇の
どんと昔しに返すなら

○日本男兒

雪降て崩壁へ北風吹ば
寒威はますく跋扈する
首せつ不撓の氣を奮ひ
花の香りは日のもとの
是ぞ百花のかいなるぞ
無情の草木たりとて
百花の犠牲に供じつゝ
清きこゝろは誰びとか
勉めよ勵めよ國びとよ
空して米賊たるなれば
みぢけよしくたん方を
恰もばいかが雪中に
惹き起すべし勉むべし

○佐久間象山

信濃路はひなにはあ

うらくはし山にも野

我が大君のくにとせしれ
不忠不孝のひとは斬れ

万物ためにひかりなき
なかに凛然あらはれて
幹は龍蛇の臥すごとく
やまとたましい代表す
見るべししにびとよ
今ころ梅がらの身をば
風にはかなく散とて
知ぬ者どとあらざらん
人は萬のをさたるぞよ
梅の花よりをとるらん
君の爲なりくにのため
吹き出す如く志想をば
惹き起すべし勉むべし

春されば花うきををり

秋つけば落紅にはへり

とをめでくの雪山雪

天津日のくるも知ず

遊ぶなる人もさはなり

然れ共さすらふるみり

春の野の花もかささず

秋の山紅葉をもみず

たらちねのはくの

かふこのまゆごもり

こもりてかがく

年ぞふるにける

○凱陣祝する歌

久方の空も長閑に新玉の

春を迎へて秋津島

風も靜に神ひつる程もあら

武士の八十氏川に立騒

波の夜ひるいとまなく

君は臣を引連て

臣は君に従ひて軍の庭に

魁掛て打つ討れつ

そが中に實に勇ましき

大丈夫の若はらから

二人り連れ向ふ矢庭に

飛來は雨か霰か

白瀧の岩をもくなく

黒鐵のたまにあたりて

はらのらは世にも人と

なりにきと古郷人々は

傳へ聞き皆打守りて

難さる折しも事なく

歸り來てめぐり

逢瀬のありけるは

弓矢の神の恵みにて

いさを世々に遺むらん

○凱戦の歌

柳櫻をこき交せし
吹き翻へる日章旗の
欣びむかふ國民の
歩兵騎兵の肅々

都のはるの朝風に
今日凱戦の我軍を
見渡すはるか彼方より
喇叭の聲の勇まし

勇む喇叭のこゑしを
勇む兵士にいさむ駒
旗もいさめば大筒も
勇みし兵士や

聞く國民は氣も勇む
凱歌も聲も勇むなり
小筒と共にいさむなり
喇叭の聲も勇まし

勇む兵士も戰場に
震ふる日も雨の夜も
火玉飛來るそが中も
爲と思はいいといなを

ありし辛苦は幾何ぞ
こほりの及鐵の
何にか厭はん大君の
喇叭の聲も勇まし

あな勇まししの兵士や
修羅の巷に出入し

國と君とのそが爲に
萬死の中に生を得て

銃と名譽を擔ひつゝ
柳櫻もうらゝかに

歸る都の春景色
喇叭の聲の勇まし

○護國の歌

汝等朕の肱股ぞと
義は山岳も雷ならず
まもれや守れ軍人

最も惶きみことのみ
死は鴻毛と覺悟して
皇國を護れ諸共に

我を育てし父母の
父母に者有者ならば
護れや守れ軍人

墳墓の國とは此國ぞ
死して忠義の鬼となれ
皇國を護れ諸共に

國の大事に死するのは
水火の中中なんその
護れや守れ軍人

兼て覺悟の前なるぞ
快義と名譽を楯にして
皇國を護れ諸共に

寄せ來る敵は多くとも
旭の御旗押し立て
護れや守れ軍人

當る鋒つよくとも
一歩も後に退かず
皇國を護れ諸共に

三千五百有餘年

汚れしと無國の名を

汚せし者ぞと後の世に

笑れぬ様覺悟して

護れや守れ軍人

皇國を護れ諸共に

丸は雷とどひくも

劍は林をなすとも

大和魂あるもの

怒るゝとはあるべきぞ

護れや守れ軍人

皇國を護れ諸共に

劍も我身に立はせし

丸も我身は通じ得ず

皇國をまゐる兵士は

身は鱗よりも侮かたし

護れや守れ軍人

皇國を護れ諸共に

善よりして今迄も

民を愛する大君と

國を愛する兵者は

かつべき者は世に

護れや守れ軍人

皇國を護れ諸共に

文明開化の春風は

今を盛りと咲き匂ふ

我數島の山ざくら

異國の風に散らじと

護れや守れ軍人

皇國を護れ諸共に

昇る旭と國の名を

地球の上に輝かし

千代に八千代も萬代も

香しき名を残さんと

護れや守れ軍人

皇國を護れ諸共に

○ロビンソン氏の一節を抄譯す

吹き來るあらし

波の おど

墨を流せる霧雲の

最と凌まじき荒浪に

二十四時の其あいだ

秋の空にはあらねども

乱れ木の葉の散る如く

上を下へと浮沈み

打廻さるゝ憂き辛らさ

たい明日の日和をば

指折り數へ待つばかり

待に待たるそのほども

早や東雲となりぬれが

今日と目出度き空らん

嵐も濤も止みなんと

ホットトと息つく暇も

何の猶豫も暴浪は

山をも欺むく大なみを

助となして運びつゝ
今や碑けん有様に
水にたいよふ

更に烈しく吼へ叫び
待あくみなく甲斐もなく
身は浮草の浮沈み

波のまにまに打任せ
一日送り二日立ち
六日六夜と過ぎ越て

果敢なき命を嘆ちつゝ
わびしき中に兎や角と
早や七日とわ成つれど

未だ止やらぬそれ已か
船は次第によはりつゝ
如何にかと泣なくも

いや益し猛き勢に
人は次第に悩みつゝ
哀れ望はたへにけり

○海外漫遊の歌

扁舟にさほさし飄せん
烟はまよう亞刺比亞海
九萬の里程はるくど
世界で一のピテミット
サハラの砂漠は渺茫と

まんゆうすれば
雲はとさす亞弗利加州
難なく埃及に上りへし
登つて彼方を見渡せば
愁雲漠々風せさむく

羅馬の古跡で感がいし
いつしか過ぎて行先は
倫動巴里のはなとつき

ジブラルタルの海峡も
是ぞ世界に名もたかき
アンステルダム伯林や

セントペートルスホルグの

再び掉さす大平洋

桑 港 や 紐 育

華盛頓へと来てみれば
いとも豊かに見ゆるぞ
歸へるは元の日本とく
秀て見ゆるを愉快なれ
琵琶の湖すいは底深し
まもれやく國のため
かゝやかすのは國人の

數百の都をあどにして
流石は自由の風ふきて
普く諸こくをけい歴し
故國のさんすい一層に
芙蓉のやまはそら高く
海内無双のせつ勝を
まもつて其名を海外に
重きつとめど覺悟せよ

○自由慷慨の歌

甲斐險河二國に跨がる
八面玲瓏たまをなし
清き心を表めいし
獨立不撓の氣をしめし
登りて四方を見渡ば

ふようのみねは
夏なほ寒き白雪は
雲間に高く聳ゆるは
國の護りの富士山に
雲か霞か白糺の

中にあらはる東洋の
 西に暁つヒマラヤ山
 長煙だん絨たなびくは
 たちまち興る愛國の
 引起しつゝ國のため
 北門銷鑰に氣を付な
 盡して其名を萬國に
 諸國は眼下に一眺め
 北部遙かにサイヘリヤ
 にじか敵か絞ゆうか
 大和男子の氣象をば
 乘馬げつ劔射的して
 盡せよ一國の爲め
 轟かしたら大ゆかい

英國
 海軍中將
 タニンソン氏作

○こがは

鶯やくひなの住かより
 柴の葉がくれ光ゆく
 百の小山のそばをすぎ
 千々の村里添ゆけば
 真砂路越て様々に
 入江に泡をうかせつゝ
 畑にうゝぎつ田に入つて
 堤の本をうちめぐり
 行道すがらさわくこと
 人は行きもし來もす
 右や左にまはるうち
 にはかに流脱り出で
 谷間を差て急ぎつ
 有るは岩角折かすり
 行橋々かくゝるらん
 語りさゝやき壁立て
 さゞれの上に齧くなり
 萩やすゝきの残りたる
 うねりうねりて歩み行
 大河さしてすゝむなり
 我は行くのみ何時迄
 のせ行く花の美しくし

いさすてやかに彼こゝ
黄金のさしれ打越て
口泡をそここゝよ
重ね行く小柴や廬を
くいで我忘るなど
時もあり群る燕の
行程におのが浅瀬に
折もあり月星しるき
我一人のせき者どに
たゆたひて再こゝを
流るなり人は行ひし
いつまでも

○ハムレット

ながらふべき但し又た
愛が思案のしどまるぞ
これに堪るが大丈夫か
深き遺恨に手向ふて
どふも心に落かねる

遊女やあめりか
立つる波に白鯉の
をほいてそのが旅路を
打逢捧のこかくれ
咲く花を打なびかする
其中をかけた脱りつ
沈む日の光をどらす
真夜中に野にさやく
落留り小草のますり
立出て大河差して
来るすれど我は行ひみ

ながらふべきに非ざる
運明いかに拙なきも
又さはあらで海よりも
これをはらすか武士か
扱も死なんか死るのは

眠ると同じ眠る間は
あらゆる浮目打捨つ
ア、死ねむるむねる時
はアこだわりが有様
無常の風にさそわれて
如何なる夢の来るやら
浮事長く忍ぶのも
九寸五分さへ持たれば
事を満もやすけれど
強者の非道世のろしり
思ふ美人の不深切
貴人の無禮又たどへ
輕しめらるゝ之を是れ
重荷を負ひて汗流し
暮せぬ暮し暮のも
死後の恐が有からぢや
登りて歸へる人をなき
物すてくこそ思はるれ

心つうのみか肉体の
是ぞ望のはてならん
もしも夢見る事あらば
なぜと云に死にねむり
此娑婆はなれ武士ども
ハア疑がひの晴れもの
是が爲かなゝせなれば
其切先で一トつさに
これをばなす慎みて
騙れる人のはづかしめ
ゆるみすきたる國の法
下人とならば善とても
堪へ忍ぶのは何故ぞ
うい目つらい目耐つゝ
又なに故ぞ是は皆
死出の山路の不思議
如何なる事の有やらん
たとへ此世にままりて

憂鬱難をなむるとも

あの世の事は、ろしや

○チャールレス、キングスレー氏悲の歌

無常を告ぐる入相の

鐘の音するたどがれに

三人の漁父は帆を上て

入る日をさして西方に

はしらす船は進み共

妻子の爲に引かざる、

こゝろの中は皆同じ

父の出船を眺めつゝ、

沖に向ひて、ゆるめる

童子は外に餘念なし

もうけは薄く子澤山

雨の降る日も風の夜も

洲に打掛る浪音の

最とすまじき其時も

かせがにやならぬ男の身

袖のひぬのは女子の身

三人の漁父の妻三人

日も西山に入相の

鐘もほのかに開ゆれば

共にあもりし燈台の

火を挑はんと程寄りて

つまめる心の夫思ひ

窓の戸開けて眺むれば

にわの雨やら暴風やら

空打過るひら雲は

いろ黒く、と物すこし

暴風は如何に吹はとて

水嵩は如何にまはとて

洲に打掛る浪音は

如何程すこく聞ば迎

かせがにやならぬ男の身

袖のひぬのは女子の身

朝日輝く砂礫に

潮引ぎ去りて其跡に

残るは三つの屍ぞ

三人の漁夫の妻三人

歸らぬ旅に門出して

歸らぬ夫の泣らかに

髪振り乱し取すがり

きゆる計りに泣入て

目も當られぬ風情なり

かせがにやならぬ男の身

袖のひぬのは女子の身

一ト日も早く世を去ら

一ト日も早く樂をせん

屍の跡のすな磯に

寄せくる涙くだけつゝ

鳴たさや鳴れよ、儘よ

○兒童の歌

來れわらはべ傍はらに

汝が遊ぶさま見れば

我等が多年苦みて

なをとげざりし疑は

忽ちとけて露ほもの

曇りも胸にと、まらす

汝が遊びたはむるを
怒うちあけて日に向ひ
清く流るゝ川水に

見ればあだかも東なる
さへづる鳥の聲聞て
臨むが如き心地せり

流るゝ水も鳥の音も
心のでどくゆたかなり
かなしき秋も過去りて

照らす朝日の汝等の
されど我等の心中は
寒き雪しも降にけり

童はへ無くば世の中は
童はへなくば我々は
前を望むもうば玉の

如何に苦しき事ならん
後ふり向も憂さばかり
闇の夜中に異ならず

知らずや茂る森の木は
清き空氣や日の光り
善き汁液を造りなし

いどうつくしき緑葉に
其作用を施して
幹を枝とを養ふを

知れよ開けき氣候を
幹にはあらで軟さか

うけて早くも感ずるは
緑の葉にてありぬるを

森を此世にたどれば

葉は童はへに比ぶへし

來れ童はへかたはらに
花にたはむれ啼く鳥も
如何なる事を告るやを

のどけき天を吹く風も
汝が清きこゝろには
我耳近くさゝやけよ

思慮を巡らし智を竭し
我等か書るけ文とても
汝が顔の樂のしさに

我等がなせる業とても
汝が様のかはゆさに
くらぶる事の有べきや

人の賞する詩や歌は
完全無けつの汝等に
汝は全ける詩歌なり

世にかさ多くなれど
及ぶべき者めらすかし
他は皆死にし言葉のみ

○夏花の所感

露の曇さは夕立に
かゝやく月に置むすれ
玉を欺く玉だれの
いとも涼しき露の

洗ながして曇たかし
千草の露のはら〜と
たすの返しに吹ちりて
葉越に秋やきぬるか

うたがふ斗り音細く
千ひらの金と一刻を
猶明け易き夏の夜の
口さがなくも愚かにも
蚤蚊やはへと汗つけて
おもひを焦す螢火や
忍ぶのきばの櫛に
訪ふ人もなき草の戸を
睨に見れば四ツの時
物の哀れは夢にだに
われを慰め樂します
今の目めたり覺たる
つゝむとすれば夏衣

庭の篋もきまゆなり
おしみし春の宵よりも
價を誰かさだむべき
夏はうるさし又暑し
賤して云は云はずして
苦しの人の袖の香を
初音をもらす郭公
叩く水鶏にやぶらるゝ
しらで寐過す人ならん
うつり變りて物ごと
深き方儀をめぐりなく
其の嬉しさを樂しむに
吹返したる峯の松かせ

第壹號

天皇及皇太后皇后皇太子太子妃皇族ニ對シ敬禮ヲ表スル時ニ用ユ

○君が代

君が代は 千代に八千代に
され石の いはほとなりて
昔のむすまで

第二號

將官及相當官并ニ將官ノ職ヲ奉スル大佐ニ對シ敬禮ヲ表スル時ニ用ユ

○海ゆかば

海ゆかば みつ く 屍
山ゆかば 草むす 屍
大君の へにこそしなめ
のどにはしなむ

第三號

軍隊相逢フ時ニ用ユ

○皇御國

皇御國の武士は いかなる事をか務むべき
唯身にもてる誠心を 我大君に盡すまで

第四號

靖國神社參拜等ニ用ユ

○國の鎮め

國の鎮めのみやしるど
今日の祭の賑はひわ
治る御代をまもりませ

いつきつらふ神みたま
天かけりてもみそなわせ

第五號

一般齋禮ニ用ユ

○命をすて

命をすて、大丈夫が
在べき限り語りつぎ
絶せずつきじ萬世も

たてし功績は天地の
いひつゆかむ後の世に

第二百十五號

分列式ノ時ニ用ユ

○扶桑歌

わが天皇の治めしる
めほ萬世もうごかねど
治たまへばとことばに
四方に輝やく御後威は
かゝる日出たわが國ぞ
天皇が恩にむくはんと
盡せよや人ちからをも

わが日本は万世も
神の御世より神ながら
勤ぬ御代とかはらぬぞ
月日のことく照すなり
やよ國民よ朝夕に
心を合せひたぶるに
あわせてつくせ人々よ

第二百十八號

登壇ノ時ニ用ユ

○めらきいね

めらき巖石をふみ割み
武士の身の常ぞかし
いむとよまたはむけおつ
宸襟をやそめくらすむ

險しき坂を越へゆくも
習せや慣る君がため
歸りて早く我君の
急げや急げ御軍よ

第二百十九號

御行ノ時ニ用ユ

○大君の

大君の
いさを尊みまつらわね
人をやはしたひらけく
みらつかしてし御軍の
ろのいさをはや

御稜威かしまし御軍の
國をことむけ千早振る
かひるおもへば大君の
功績貴し其みいつはや

第二百二十號

離禮ノ途上ニ用ユ

○吹さなす笛

ふきなす笛の其をとも
者の哀はれをしり顔に
千百萬の敵軍も

捧ぐる旗の其いろも
今日は者ぞかなしけれ
とりてきり入きまきしらすと

おもへる我等が袖も
○軍旗の歌

其一

二千五百年このかたに
其國守る軍人よ
大君の御標を
いかなる敵をも打攘
地球のうへに輝かせ
忠と勇とにこの旗を

涙の雨にぬれにけり

光りかやく日本國
なんじの仰ぐ大旗は
君の御言どかしてみて
忠と勇とに此はたを
いかなる寇をも打攘
地球のうへに輝かせ

其二

昇る朝日と諸どもに
汝をたすけ玉ふべし
此八洲國の中ならで
神功皇后豊太閤
忠と勇とに此旗を

代々の皇の神くは

汝のいさほを建る場は
外つ國々にありとしれ
昔の功績おもらべし
地球の上に輝かせ

其三

四方海なる日本こく
すゑ頼母しき金城は

砲臺よりも艦よりも
なんじら忠義の軍ぞ

翼はげしき鷲とて
我皇國に仇をなす
雷なせる大砲と
いかなる敵をも打攘
地球の上に輝かせ

其四

皇國のたまご軍人は
ひかしは弓矢鎗刀
汝のおめる銃劍は
揮ふべき時ふるひつゝ
此大御旗を押し立て

爪牙鋭き獅子とて
兇者共のあるならば
電光あざむく劍もて
忠と勇とに此旗を

用ゆる利器は何物ぞ
いまは銃砲軍かんよ
大和魂ある人の
驚をも獅子をも打攘
いかなる敵をも打攘

其五

我大君の御標しと
ますし光り輝やきて
吾人陸海軍人の
祝ひとなひて悦びて
烈しき戦すみしとき
ますし光り輝やきて

國のひかりと建る旗
あだを平げ民を撫で
功績ほめて諸人が
榮譽は限りなるべし
國の光りとこの旗を
萬世不朽の帝國の

御稜威は世界に響らん

○行軍歌

我日本のくにがらは
神の御國と稱へきて
遠き威夷が國までも
射すや草葉の露計
類も少なき緒環の
守るは誰の職務ぞや
五つの訓誠銘肝して
多聚かる人の其中に
厚き仁恵は駿河なる
伊勢の海すら尙淺く
寇なす戎夷ありとせば
討ち平らげて大きみの

○抜刀隊第一

我れは官軍我が敵は
敵の大將たるものは
これに従ふつはるものは

御稜威は世界に響らん

故き神代のころよりも
五百海坂へだてたる
光かゝやく旭子の
侮りうけし例したに
盡せぬ皇帝の功績を
誠實める身は甘美にも
束のあいだも忘るな
醜の御循と抜搦れて
不二の高峰も尙低く
その皇に若しや又
隣隣ふとはなきものぞ
御こゝろ慰め奉れ

天地いれざる朝敵ぞ
古今無双の英雄うで
共に標杆決死の士

鬼神に耻ぬ勇あるも
起せしものは昔より
敵の亡るそれまでは
玉散る劔ぬきつれて

○同 第二

皇國の風とものゝあは
維新以來すたれたる
亦世に出る身の譽れ
刃のもとに死ぬべきぞ
死すべき時は今なるぞ
敵の亡ぶるうれまでは
玉散る劔ぬきつれて

○同 第三

前をのぞめば劔なり
劔ぎのやまに登るのは
此世に於て面の當り
我身のなせる罪むらさ
賊を征伐するがため

てんの許さぬ逆反を
棄へしためし非ざるぞ
進めやすめ諸共に
死するかくこで進べし

その身をまもる魂の
日本刀のいまさら
敵も味方も諸どもに
日本魂あるものは
人におくれて耻かくな
進めやすめ諸共に
死する覚悟で進むべし

右も左りもみな劔
未來のとも聞つるに
劔ぎのやまに登るのも
滅だめにはあらずして
劔のやまも何のろの

敵の亡るそれまでは
王ちる。劔ぬきつれて

○同 第四

劔の光閃くは
四方に打出す砲聲は
敵の刃に伏す者や
絶て果なく死する身の
其血は流れて川を爲す
敵の亡る夫までは
玉散る劔抜かれて

○同 第五

彈丸雨飛の間だにも
進むわが身は野鼠に
果かなき最斯遠とも
死して甲斐者なれば
われと思はん人達は
敵の亡るそれまでは
玉ちる劔ぬきつれて

進めや進めもる共に
死する覺悟で進むべし

雲間に見ゆる電か
天に轟く雷か
丸に碎けて玉の緒の
歸は積て山を爲し
死地に入らぬ君の爲め
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

二つ無き身を惜ずに
ふかれて消ゆる白露の
忠義の爲に死する身は
死するも更に憾なし
一歩も後へひくなかれ
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

○同 第六

我今此に死ん身は
捨べき者は命なり
忠義の爲に死する身の
永く傳へて残らん
羨もなき犬と云るゝな
敵の亡る夫までは
玉散る劔抜つれて

○大軍歌

○第一

來れや來れいざきたれ
寄來るてきは多く共

○第二

進めや進めいざすすめ
劔は林を爲すとても

○第三

勇めや勇め皆いざめ
御國を守る兵士よ

君の爲なり國の爲め
假令屍は朽るども

名は芳しく後の世に
武士と生た甲斐もなく
卑怯者ぞと誹られな
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

御國を守れ諸ともに
恐るゝなかれ恐るゝな

陣はあられど飛來も
ためろふとなく進ゆけ

劔も彈玉も何のその
身は鐵よりも猶堅し

○第四
強めよ勉めよ諸共に
汚せし者ども後の世に

汚せしとなき國の名を
云れぬやうに覺悟して

○第五
懐へよ懐へよ能く懐
我身の失せざる其中は

神より受たる此國には
人手に決して渡さずと

○第六
守れや守れやみな守れ
おろるゝ者は父母の

異國の奴隷となるを
墳墓の國をよくまもれ

○第七
恐るゝなかれ恐るゝな
國ればあゝする兵に

民おば愛するわが君の
勝べき者は世にあらず

○第八
進めや進めや皆進め
命をねします進みゆけ

腐りし心のなきものは
御國の旗をば押立て

○第九
進めや進め皆すゝめ
進めや進め皆すゝめ

御國の旗をば押立て
祖先の國をば守りつゝ

死すとも退ことなかれ

國の爲なり君の爲

○進軍歌

彈丸は霰と空にとび
雷擬ふ砲聲に
我魂の緒も打絶ん
進むに猛き武士は
屍は野邊に曝すとも
櫻に匂ふ九段坂
祭り納めにし諸靈は
寇なす戒夷盡るまで
何爲歴はんしぎ島の
堅きに堅る金剛の
人皆なべて羨慕す
故郷人に品格高く

劍は野邊の電か
吹きくる風も醒く
今はの時ぞ勇壯しく
躊躇ふ事は何のその
名は後の代に醜郁しく
空に聳ゆる靖國の
は大丈夫の龜鑑ぞへ
假命や火の中水のそも
倭だまじい飽までも
石より光かゝやくは
青白なせる桐の章
錦を飾る心氣よさ

○進聲歌テニソン氏

○第一

一里半なり一里半
死地に乗り入る六百騎

並びて進む一里半
將は掛れの令くだす

士卒たる身の身を以て
答をなすも分ならず
死ぬるの外はらざらん

○第二

右を望めば大筒ぞ
共に打出す砲聲は
響の如く凄まじや
猛り立てぞ進むなり
勇で乗入る六百騎

○第三

拔ば王たる刀ばをば
きら／＼と輝けり
大砲方をなで切りに
煙の中に飛こみて
太刀の早業見事なり
迷にさゝふる事ならず
馬の頭ぞ立直す
死はいとわづかなり

陣を糾は分ならず
これ命にこれに従ひて
死地に乗り入る六百騎

敵も左りも又つゝぞ
天にも響く雷ちの
弾丸雨飛のあいだにも
死地にこそ入れ鱗口

皆もろ共に振あげて
敵陣近くのり掛けり
最も目冷まき働さぞ
烈しき陣を破るなり
敵の軍勢たち／＼と
むらく／＼とむらくづれ
以前に進みし六百騎

○第四

右を望めば大筒ぞ
共に打出す砲聲は
弾丸雨飛の其中に
死地より出て乗替す
歸るはもとの一里半
残るはいとわづか也

○第五

あゝ勇ましき武士の
手柄は永く傳へなん
どる年あまた重りて
頭に霜を戴きて
六百人の豪傑が
そのふる事を語るふて

○英國海軍歌 第一

イギリス國の海岸を
一千年のろの間だ
戦争のみか嵐をも

左りも後にも又筒ぞ
天にとゞろく雷ちぞ
從横むじんに切靡く
鱗の口より脱れいで
六百人のそのなかに

よきかんばしき其譽れ
今のおさなご生立て
腰は梓の弓となり
孫ひこやしやご多時
敵の陣へと乗り入る
末代までも名は朽じ

カムプベム氏

固く守れる水兵は
汝が建る大はたは
支へ得たれば此後も

敵を受ともたゆみなく
軍烈しくあらばあれ

○第一

立ちくる海の浪間方
汝をたすけ玉ふべし
其甲板はてがらの鳩
大子ルリスヤブレーキの
軍烈しくあればあれ

○第三

四方海なるブリタニヤ
山とたちくる波とても
慣て我家に異ならず
船より放ちどいろかし
軍烈しくあればあれ

○自由の歌

天には自由の鬼となり
自由よ自由やよ自由
天地自然の約そくぞ

勇氣の限りひるがへせ
嵐も強く吹ばふけ

汝が祖先あらはれて
蓋し祖先の軍艦の
大海原はその墓場
死にし處は人しのぶ
嵐も強く吹かばふけ

とりでも城も用なし
千尋のそこの淵とても
いかづちなせる大砲を
波を分けつゝ進むゆ
嵐も強く吹かばふけ

地にわ自由の人たらん
汝と我れがその中は
千代も八千代も末掛て

此世のあらん限りまで

いかにぞ仇を破るべき
月に村雲花に風
話せば長い事ながら
その人民を自由にし

數多の人のうき苦勞
我政權を張んとて再び
企てたりしセサルは

議院の中で殺されたり
民を奴隸になさんより
我の羅馬を愛するは
羅馬の民の望なら
捨る命はいと易し
自由を壓制なさんとして
邪道はいかに正道に
民のいかりは火の如く
岩をも砕く勢ひに
黄金をかざす冠は

二人がなかの約束を

さはさりながら世の中は
まゝにならば人の身ぞ
古し羅馬の國を聞く
共和の政治を立んため
それとも知らで慾の爲
帝位に昇らんと

その親友の手にかけり
その親友のいふことに
寧ろセサルを殺さばや
親友よりも甚し
我身も茲に諸共に
佛蘭西國のルイス帝
種々の手段を廻せど
打勝ことなるべきぞ
又洪水のあふれきて
いと畏くも帝王の
斷頭機械の上に落ち

あつればかなく也ける
自業自得といむべけれ
同じ車の一ツみち
コロソウエルが手にもち
天をも回らす計にて
自由の基を立てたりき
もと英國の民なれど
自由の人となりたさに
深山荆棘はまだ愚か
あを海原を打ち渡り
殖民なせし心ろ根ば
然るに猶も英吉利の
暴君汚吏の壓制に
義兵を擧ぐる聞かちに
死ぬる覺悟で七年の
遂に敵をば追ひ拂ひ
ワシントンの名に負
國のほまれや再まし

誰を怨みんあつ制の
英吉利國の革命も
昨日の王は今日の賊
自由の旗の招きには
チヤレス王は誅戮し
北亞米加の合衆國
其發端をたづぬれば
故郷の名残に氣も止
人のふみしともなき
見も知りせぬ亞利加へ
いかにあはれに思ふ
ほだしの綱は離られず
詰り詰りて國のため
我れ後れじと親も子も
長い月日の攻め守り
目出度立てし獨立國
都と共にさかへゆく
嗚呼彼と云ひこれと云ひ

自由の爲には昔より
又死に別れする者を
土地の變りはあるなれど
人の自由といふ者わ
つとめよ勵め諸人よ
余此文をかきおわる
眠りをさます鐘の音の

○玉の緒の歌

眠る心はしぬるなり
あすおも知らぬ我命
なごゝわれにいふわ悪
我命こそたしかなれ
人わ塵にて又散ると
人の願ひわ喜てびか
人の願はこれならず
今日より勝る明日を
聞きむねだも亦たへず
一日くくと近くなる

幾多の人の生き別れ
我れ東洋の人ぢやとて
なごか心にかはるべき
天地自然の道なるぞ
身屈の民と云わるゝな
時しも春のゆめ枕
いともさやかに聞へる

見へる形はおぼるなり

あわれはかなき夢ぞかし
我命こそまことなれ
墓わおわりの場所なら
いふわからだの上のと
人のねがいわ悲みか
唯怠らず働きて
業は久しく時は馳す
敵の如く打ちつつけ
死出の旅をば速すなる

おらそい多き世の中に
此身をよせてさきかげに
言なき唾となるなかれ
如何に未來わ樂しきも
共にこれをは捨置て
はたらく可い今日斗
我れとても人相同じ
ゆめし忘らず勉なば
うみより荒き世の中に
獨り漂ふ我友よ
我名をきいて進まなん
事業ばかりに心して
高きに至り馳ゆけよ

○花月の歌

月と花とわ昔しより
たがよろこばぬ人やある
心はつれてうき事の
足柄山のかせすごとく

なりてますく進む
ひかる、牛と成なかれ
いかに空しく過去成も
われを忘れず神をしれ
すぐれたる人世に多し
勉めはげめば斯ならん
長く残さん此名をば
舟失ひてなみの間に
我名を聞て勇まなん
さすれば人は氣を張て
如何なる運も事せず
たのしみなるぞ働けよ

唯が樂まぬ人やある
さはさりながら月花も
種となれるも多からん
松の風そふ籬の音も

これより多く陸奥へ
死なか生るか白河の
勿來の關の春のくれ
都の空わ花ぐもり
櫻のゆきは將軍の
戟の枕に夜はなれて
越路の山の月白く
故郷の空に歸るぞと
花の都はあれはて、
今宵一夜の宿たのむ
滅亡て、にきわまりて
佞人ばらの讒により
二人ともなき賢臣わ
御衣をさけて涙なる
我君今わ賊のため
無念の心やるせなく
我が赤心申さんに
月の光や花の香や

つくさど、身の末は
關れば雲や隔つらん
駒をといめて眺むれば
鎧の袖に散かゝる
びんの霜より尙白し
秋のあわれは知されど
雲間を渡る鷹が音も
思へば我もなつかし、
何處が我身の置どころ
櫻のつゆにそでぬれて
平家の末を悲しけれ
諫めの言葉空られず
筑紫の浦のわびすまい
心の底わ如何ならん
遠き島ちに行たまふ
十字をしるす櫻木の
杯か多言を要すべき
いく萬年を経とて

更に變わなきなるに
月を見て酔ひ花を見
只一場のゆめの間に
世のなり行を無常なれ
上にわ君を煩はし
國の乱るゝその時わ
花の色香は匂ふとも
されば世間の諸人よ
くにの光を東海の
國の譽れを三吉野の
するこそ今の勉めなり
樂しき月見して見たや

○勸學の詩

昔し唐土の朱文公
わが學問を進めんと
一生涯は春の夜の

國の東西世の古今

常なき者わ世乃治乱
ねむれる春の手枕
うつる興廢存ぼうの
若しも世運の拙なくて
下にわ民を苦勞させ
月の光りはかゝやくも
など樂のしあるべきぞ
今より眞心ひきれてし
月よりも尙のゝやかし
花よりも尙芳ばしく
ちかつて斯もなせし後
樂しき花見して見たや

よに博學の大人ながら
少年易老の詩を作り
夢の如しとなげさけり

人の高卑を問はずして

學びの道に就くものわ
同じ多少の慷慨を

春の初花あきのつき
都て此世の物ごとに
わが學藝をかへりみて

池のみぎわの春艸わ
軒端にしげる桐の葉わ
此年も半ば過ぬるを

年の月日わ長けれど
ひとこの如く思われて
螢や雪の光にて

昔の人の學問は
なほ賢人のなげきあり
投に小枝に未葉まで

いかに才能あり
起さぬことのあるべしや

夏のみどり葉冬の雪
心をとむる時あらば
過る月日を思ふべし

みじのき夢も覺ぬまに
吹く秋風にさそわれて
ふみ讀人は知らずやは

難波人江の村あしの
我身の上のはづかしさ
ふみは讀ども業ならぬ

唯ひとすしの道なれど
今わ學げい多端にて
いかで凡夫の能すべき

左わ云ふものゝ語に
海のはじめわしづく
心をこめていつまでも

たどひ多くにわたらも
身の爲となる事多から
蜂に能あり密つくる

勉めよくたゆみなく
難き事とていとふなよ
教のやまにしをりあり

○朝顔に寄る勤學の
庭の垣根のあさがほよ
咲ともつきせぬ其花の
同じ天地のめぐみにて
ふかきてゝろを白露の
人こそ花に劣るらん

山のはじめは一塊土
いかに急げと詮わなし
怠らぬこそよかりけれ

唯一藝を修めなば
蜘蛛に藝あり網をはり
何とて蟲に及ばざる

進み進めよよとみなく
學びの海に舟路あり
丈夫何かわはるべき

朝な〜に怠たらす
いろといひ又かたち迄
我等の目おは慰さむる
晝をも知で寝くたゝる
學びの兒よこの花に

負けず起出機嫌よく
親と我身の無事を謝し
怠らぬやうつとめよや
この朝顔にも勝るべし
露の散る間も怠らず

○熊本籠城の歌

西も東もみな敵ぞ
寄くる敵は不知火の
世にも名高き猛ら夫の

顔うち洗ひ神々に
其日〜の課業おは
やがて汝の實も花も
いまをつばみの汝の身
よくつとめよや學の兒

西九州に名もたかき
敵の總督隆盛は
これにしたがふ大將は

熊本城を圍みけり
古今武双の豪傑で
桐野篠原村田など

中にも逸見十郎太
其外兵士二三まん
進み打出す砲聲に

慄悍決死の烈丈夫
何れおどらぬ薩摩武士
天地も崩るばかりなり

天地は崩れ山河は
動かぬものは君が御代
忠義の旗を振かざし

裂くるためしあらば
城の中なる官軍は
死を視る歸する如にて

たゞ一筋に國の爲め
過ぎし普佛の戦に
長く青史を汚さたり

進みすゝんで防戦す
蔑士の城の降りしは
それにあめらで城中は

千早の城の楠公が
谷少將今は中將を始し
家をも身をも打忘れ

唯陽城の張巡か
下兵卒に至るまで
一心不乱に防戦す

此時都の方よりは
ふぐの官軍出陣す
空飛ぶ鳥のそれならで

錦の御旗ひるかへし
されども城の連絡は
翼なけれハ通下得ず

城中外もろどもに
折からたけき若者が

音信する由なかりけり
國の爲とて健氣にも

單身劍を提さげて

城を出でつゝ夜に乘じ

蟻のはい出る隙もなき
都の軍に身を投じ
語りつ問ひつ示し合

賊圍の中を潜りいで
城の中なる有さまを
賊兵はらを打破り

爰に始めて連絡の
地中の魚も時を得て
進めくの號令に

解けて嬉しく厚氷り
跳るこゝろの活潑地
萬銃天地に鳴りひびき

西北南東なる
空前絶後の功を立て
我日本の益良雄を

かぞみの賊をうち攘ひ
名を揚げ父母を顯せし
譽め誤まぬ者ぞなき

○天窓の光

天窓の光こしの弓
學べや學べ尙まなべ
落第及第已がまゝ
心のほをを一線に

引返さじな斃るども
かくても盡さじ文乃道
常に業を怠らす
勉めよはげめ文の道

學士の望み路遠く
其真心を變るなく
寄宿の奥も教室も
何處にありとも變りなく

○復古の歌

王政復古のそのかみを
三とせの冬の十二月
みやこの空におわかへる
世はかり事も亂れつゝ
鞍馬にびくどきの聲
星のしらるるも三疊の
あかつき暗き鳥羽伏見
錦きの御旗ひるがへし
勇氣いやますすらすら
壁きわたる修羅の道
もしをにらむる紅葉の
踏しだぎゆく戦場の
弱すつおぎつかの間も

及第定めなければ
勉めよはげめ文の道
學びの家は一つなり
勉めよ勤め文のみち

おもへば凄し慶應の
九日の日ははじめにて
春のひかりもぬぐ玉の
あやめもわかぬ住染の
よろひの袖にかいやく
影うすれ行さしぐしの
大内山のやまかせに
大將軍のいでましに
戦よばるもいかづちと
斬り斬られつ阿吽叫喚
敵か味方が彼は離れ時
習ひ常なきつゆの身と
おほへる雲のたぢまは

道のはてことあはれぬ
炭さかまく泥の城
煙のすへのかげろるも
のどけき春はうらやま
かたりつゝ酌む盃に
この歌げこそ樂じけれ

○詠史

武士の魂と下たへつゝ
やまと心のくもりなく
赤坂山にたてこもり
おろしの風にかたぎらば
散行きてけりかの本の
又引かへし攻め來れば
心極めて櫻井の
子に教つゝのこしおき
うちしたかへて濠川
謀りし事もあわとなり
豫てかふぞと空に滿つ

天地もうごし震動に
おほへる雲のたぢまは
さえて治る君がよの
昔かたりとすぎし世を
老たる影もかつ見ゆる

其名かれせぬ楠の木
君につかへて國のたぢ
あるは千早に吹をろす
たまりもあへず散々ど
いやつきしきに打寄て
今を限に死なばやと
里にかほれる言の葉を
其身はやがてつはもの
そこをふかみて赤心に
消て戦の敗れると
やまと心は三吉の

はなを散てし憐れさを
暫時まどろむ夢をさへ
心をつぎて君がため
家に傳へしみだらしの
いるてふ事を記し置
實にたくびなき丈夫の
國を枕になしてける
傳へ聞くだに身もさく

○日本魂

日本魂其は何ぞ
外國人の侮を
是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
憐む人迎も諸共に
是ぞ日本の心なる
日本たましひ其は何ぞ
如何なる事の有る迎も
是ぞ日本の心なる

はやくも仇の傳へ聞く
驚かなんとむらさきの
盡す心はたゆみなく
梓のゆみのなきかずに
吉の山のかほれるも
親子胸からのこらすも
赤き心を今も世に
なりにける哉あり丈夫

寄せ來る敵を打拂へ
夢にも受ることばなし
是ぞ日本の心なる
筑紫のはてや陸奥の
偏へに盡す國のため
是ぞ日本の心なる
割れは亡び合へば立つ
心合して割れさらむ
是ぞ日本の心なる

日本魂其は何ぞ
ちからの有ん限りには
是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
國に無學の跡を絶ち
是ぞ日本の心なる
日本たましひ其は何ぞ
家の富めるも貧しきも
是ぞ日本の心なる
日本たましひ其は何ぞ
道ある者とまじはるに
是ぞ日本の心なる
日本たましひ其は何ぞ
まことを盡す其の爲に
是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
正しき道の刃にて
是ぞ日本の心なる

人々勉め怠らず
國を開きて利を興す
是ぞ日本の心なる
學びの道を盛んにし
智識を以て名を揚る
是ぞ日本の心なる
たつとき人も卑人も
相親しみて僻なし
是ぞ日本の心なる
外國人を侮らず
我ど是との隔てなし
是ぞ日本の心なる
忠義心を堅く取り
身をへ棄ても動かじよ
是ぞ日本の心なる
弱を挨けて強を驍ち
無理非道をば亡ぼさむ
是ぞ日本の心なる

日本たましひ其は何ぞ
慈悲のこゝろを擴るめ
是ぞ日本の心なれ

幸なき者を憐みで
禽獸にまで及ぼされ
是ぞ日本の心なれ

○新年學生に寄す

隙行く駒の足はやく
既に過ぎり盡きて、
春風四方に吹き渡り
雲は間近く降り來て
軒に聳ゆる日の丸の
國の榮をこぼふきぬ
或は鞠にあるいはか根
實に治まれる御代の春
光り輝やく其本は
花さへ葉さへ咲き茂り
知恵てふ玉を研けば
學びの道をおこたらす
今の御身等は石かはら
教へみちびく師の言葉

明治十歳も八餘り
悦び迎ふあらたまの
そらにたなびく紫の
飾り立てたる門松や
御旗をこめて目出度も
童子乙女の餘念なく
思ひくの手遊びわ
斯もいみじく日の本の
教への庭に吾人の
今日明日と日に益て
童子乙女よ起居にも
通へよ學びの園許へ
光りもいでぬ玉なれば
守りてこゝろ盡しなむ

いつか光りも増す鏡
ゆめ怠りぞもの學び
幼なき時に學ばずは
今日其玉を研かずは
學べよ學べ道まなべ

○童子の死を悼詩

夏は過ぎけり初秋の
彼鳥部野は如何ならん
いと物凄き風ぞふく
友に離れてさまよふと
彼兒の友は多かるも
遺びたわむれ樂むに
くさ生ひ出づる苔下に
呼かへさんに術もなく
嘆きにしづむ父母が
手むけの水も吾子が爲
心順直においたちてと
水の泡とを消へ失せて

世に崇められ愛られん
ゆめ忘れなど玉研き
老て必らず悔あらん
昨日の光の失やらん
研よ研け玉みがけ

いといさびしき夕暮や
あはれにすたく虫の
彼兒はひとり父母や
果ひつゝくる果敢なや
皆すこやかに已がまふ
彼兒ばかりは鳥部山
屍留めて去りし魂しは
應ふる者はたゞ返響
墓場の前に立つる花
悪しき病にかされて
愛で育てたる事もみな
名のみ残せしはかな

實にや浮世は夢なれや
今日は彼世に旅立ちて
幼かに見ゆる眼先に
魂にはあらで煩ひし

○學生勤學の辭

此世に生るゝ人々は
生れ得たるの天質は
勉めよはげめ我童子
貧しき家に生るゝも
尊き人の子たりとも
勉めよはげめ我童子

なんじが常に談やめる
帯てふ人は年や經る
勉めよはげめ我童子
たまの機台に住居して
殖生の小居にかがまり
勉めよはげめ我童子

昨日彼兒の顔見しが
言葉かわさん術なきか
顯れきしは亡き魂か
こゝろ乃なせる幻影か

費賤貧富の別あるも
みがけば晴る玉のくも
よく守りてよ師の教
學び次第で富やする
學び次第で卑しまる
よく守りてよ師の教

勝に輝く勳章は
辛苦ぞしけん書讀を
よく守りてよ師の教
錦をまとひ常は頭
襪をきるのも唯心
よく守りてよ師の教

譽れを得んも名を譽る
こゝろ根やせて苟くも
つとめよはげめ我童子
世に君子とも大人と
ほたるをあつめ月の窓
勉めよはげめ我童子

かくのごとくに呉々も
青葉をつくし勤むるも
つとめよはげめ我童子

○將碁の盤

將碁の盤のくみたてに
金銀桂馬飛車や角
役目定めてたのが行
前後左右を掛めぐり
せめ討るゝもかゝみず
一人の王をまもる爲

幹わりてこそ開く花
美じ結果を望むかな
よく守りてよ師の教
仰がる人は古今とも
其苦は知らず數ふとも
よく守りてよ師の教

くり返しつゝ理を極め
國の爲なり汝のため
よくまもりてよ師の教
心を止めて誰も見よ
香車歩兵とそれくゝに
道一どすじの外は見す
獨となるも者ともせず
いのちをすてゝ働くも
二つの盤をたもつ爲

秋の夕

憂き世のちりは隔ねを
昔の通ひ路世離れて
松吹く嵐たけのふめ
あま津乙女やかき鳴す
のき端にかゝる蜘蛛や
くも井の月に照添へて
草の根ごとく夜もすが
千草の花をあやなしや
萬有物をなかわれは
斯く面白の秋の夜も
夜は憂き情を欺ちつ
姑しほのめく稻妻の
思ひわびつゝ夕暗みに

○世渡りの歌

宜も出来たり買りたり
わけて今年の秋穫を
またとめらじな國本も
爰にかゝると聞からに
すき返しても長き日の
そののみならず霖雨や
夜の目もねに引板の番
野分の風の無愁やな
世の常なきを嘲つまゆ
嗚呼六づかしや世渡や

もの賣業はむかしこそ
國のみかりも身の幸も
あらずと聞ば矢も猶も
輸出輸入の平きんや
取もとさんと健氣なる
あへな 外れ穢幕の
賣れば借られ買へば損
きへて果敢なく雲霞
世の常なきを嘲つより
嗚呼六かしの世渡りや

こまも車もれとづれぬ
衆の戸扉を住よかる
ともなき宿を慰めて
琴の調ときまゆなり
糸に貫らめく白露の
たまの藤と見へにける
機織り虫のまへ高し
明日はれりてん唐錦
造化の妙ぞ知られける
衣かたしき獨りぬる
慰めかねる人もあり
消て跡なき世の中を
感ひ渉るは憐れなり
往來の人も稻のなみ
見れば農ほとわき業は
こゝに基のし民命も

銀をうりて銀を買ひ
腕も肘もぬげさうに
びでりに水のかげ引や
さるに一日野も山も
泣にもなけず取分て
外に詮術なかりける

賤しといへぞ今の世は
もどむる道もこの外に
早溜らじと投げ捨て
彼に得られし商權を
むねざんよふの正鵠は
設けどころか埒もなく
枝と頼みし資本も子も
あらしの庭の花紅葉
外に詮術なかりけり

● 掉一本に浮々と
遊びがてらに渡らるゝ
危険を怯ぢす畏れず
日頃の伎倆願はずは
よるべき憂を求めねば
共に根はなき浮草の
勝ふ人なき身の不運
月にうそふき花に酔
世の常なきを嘆つより
嗚呼六つかしき世渡や

● 世わたる業は多けれど
つてさ廻ることわざの
おなじ羽色の蝶鳥は
其生活は習ふより
傍目をふらすにすらに
又あすよりは工夫して

● 此處の泊りや彼所の瀧
舟子も暴風の危険あり
名譽の海に乗り出し
いと易けれど夫どても
よし覓むとも其憂も
憂き艱難をよくに見て
はり裂く胸を押鎖め
流るみづを友として
外に詮術なかりけり

● 彼に利あれば
時を走るも田を飛も
れろかの事よ細虫すら
なれし手業を怠らず
明日は今日明日後日は
解先の立て計詰ど

● 其熱練の遣でんとに
はげみ進めばのすから
ひとひと樂に傍目より
嗚呼いとやすの世渡や

○送學友歸郷歌

● 五年六年諸どもに
互に勵みはげましつ
光りのとけき春の日や
五月雨晴れぬ夏の日も
いと樂しく過しけり

● 月日の流れ早くして
昨日諸ども住なれし
明日は旗路に出船の
かしまたち今祝ふなり
いざやほせく其酒を

● 歌へや舞や皆共もに

● 光りを加へ漸やくに
我を知らず一日より
羨むてを聞く時は

● 同じ學びの窓の内に
慰められ慰さめつ
月影清き秋の夜や
雪ありし冬の夜も
いとうれしく暮しけり

● 五年六年とく立ちて
學びの舍を出たりし
ともなり師なり君達の
祝の酒を進むなり
いざやくめく此酒を

● 舞へや歌へや諸どもに

今日を限りぞ明日は
敵といふは思こと
難きも難き事ならず
聲をば雲井に上るなる

さはいへ心有あけの
行衛思へばうたてなや
天と地とのあいだを
へだてはならじ西東

同じ團扇のともびとよ
浮世のまどは何こと
とりとて心おくらすな
かくして後に思ふこと
風ふきはらふ雲間より

嗚呼面白の影色なや
明日の別のいとづらき

又逢ふ事の易きやは
雲をも排く心あらば
月の前ゆくほどとぎす
おれ見よ高く上るなる

月影かくすむらくもの
浮世の事に似たる哉
家となしつゝ過る身は
北も南もみなをなじ

雲になやめる月を見よ
思ふまゝにはならぬ共
耐へよ忍べよ怠るな
かなふ者とや見とや人
月は出にけりけりにけり

そゞろうき立つ思かな
愁をはらふ玉はなき

とれや人々酌むさけの
深き契りを忘るなよ
月諸どもにやすらはで

○天長節歌

あまつ日影は變らねど
晴み曇れみ定まらで
今はとわこる時つかせ
豊さかのほる御光を
君は八千ませ八千ませ

つきぬためしも有磯海
今宵ひと夜をあかし濁
歌へやまへや例るまで

世のうき雲の行かひに
七もどせに成ぬるを
四方の紫雲ふきはらひ
仰ぐ御代こそ樂しけれ
君は千代せ八千代ませ

大和錦きのうるはしき
大和魂たぐひなき
開き玉へるもろくの
并ひ進みて日に月は
君は千代せ八千代ませ
萬の國もへたてじと
八島のうみのかりなく
大松小舟くにつもの

色もいよ／＼香あべく
光増々そひぬべく
學の道もなすかざらむ
榮へ行御代こそ樂けれ
君は千代せ八千代ませ
水門のとざし開きたる
廣き御心したひつゝ
積みてはこべは年々に

民の煙のたちこへて
君は千代も八千代ませ

賑をふ御代こそ樂けれ
君は千代も八千代ませ

めぐみの露のからずば
この大御代に生れうば
玉のうでなる柴の戸も
祝ふさがさどり〜に
君は千代ませ八千代ませ

民馴いかで榮ゆべき
此さちいかで得るべき
わが大君のよろず代を
明ふ今日こそ樂しけり
君は千代も八千代ませ

○湖の少女が歌

吹きし喇叭の音につれて
年経るかしの木蔭より
一人の少女あらはれぬ
遙けき岸邊にみどりな
青きみぎはの眞砂地に
彼方あなたに靡しめり
獵夫は早くも身をすま
知るや白齒の乙女子が
縁の髪はあとにたれ
自とあさしあどけなさ
頭をもだけ氣をしずめ
龍の宮なる乙姫も
傳へ聞にしクリースの
いといやさしく愛らし
如何で及ばん此姿
や、添むるともかまひじな

島の岩間に指しいでし
棹さし出し小船の上
入江の景色見渡せば
したれ揚柳の糸の末
うつさゝ浪に誘れつ
岸に小船のつきぬれば
木かげかへれて窺ふを
耳かたむけつ目を配り
花瓣まかにくちびるの
喇叭の音や聞えんと
立ちし姿はこれやこれ
斯かあらんと思はるゝ
天津乙女やうみ姫の
巧を極めし彫刻も
よしや日影に面影の
いやまじきよくみゆる

よしや宮廷玉殿の
歩行む姿のこよくと
ふみてし野邊の蓮花草
や、鄙ひたる言の葉も
彼樂郷に住ときく
聞く人々は心さく

●軍人訣死ノ歌

其一

アムジアズの戦の
引しりどきし其あとに
傷手にたへず打たをれ
身よりの者はたれ一人
夕日かすかに差添へて
聲もあはれに鳴渡たる
此もそま此處手負あて
腕こまぬきて愁然と
言置こまはあらずやと
手負はにっこり打笑て
ほつと一息付きあへず

擧止動作なきとても
夫より受けし其かるさ
又もやびんとはね回る
優に柔しき其聲音
伽れふひんかの聲にやと
飛散行ん西方淨土
今はおはりて敵味方
年また若き一人の兵士
苦痛になやみうめけ共
いたしかしづく音も無
ぬぐらにかへる夕鳥
只、その方へに戦友の
刀をつるにそがり寄り
見やる目元のうるみつ、
慰められ毛嬉しげに
くたゝる血汐をすゝりつ、
よめる心を振り起てし

見らるゝ如き此いたで
打死せしと故郷の
あゝあらざらん今一度
弓矢に年を故郷は
ラインの河の邊りにて

其二

永らうべきもぬかし
我友とちに語りてよ
故郷見うることもかな
路いと遠しビンゲンよ
ビンゲン村よ故郷は

あゝ故郷に歸へりなば
色も香もこく梅の花
我が勇ましき手柄をば
今や我が身は増長雄に
敵か味方か名乗よと
山彦とよむ雄たけびも
漸とも引く夕かすみ
千草靡きて森林
そこに打死かして手負
野草は血しほに紅の
あゝ、數多き打死に
功名ありし者もあり

友はちからに語りてよ
咲き匂ふ園の其の中に
聞かんと云てつとらう時
れとらず雄く戦かへり
入り乱れつゝ戦かへる
貝鐘太鼓のうつ音も
吹く野の風の腥く
いとももの凄うめくなり
矢傷九傷たちきずに
入る日かなしく影すなり
あるは多くの戦に
中に年またなほ若く

いとたくましく其胸の
あまたの望もたへはて
ヲリンの河のほとりなる

また活けがたき受傷に
魂はいつこに迷ふらむ
ピンゲン村より来りけり

其三

吾たらちめに語りてよ
御思は海山かへがたし
あどに残しはらからの
仕ふまつれば此身をば
思へばかなき是までは
家を立出てそこ此所と
あゝ君父の其むかし
いくぞやくぞの戦の
まだをさなきよひたふるよ
いかで吾身も國のため
思はぬ事ぞなかりける
父みまごりてはからに
何ほりせはや望みなし
めで携へし一ふりの

はたとしあまは是迄の
打死するはかねての覺悟
われにかはりて幾にも
不幸の子ぞと忙れてよ
野邊の小鳥と身をして
血氣にまかしよよへり
御國のためと出行きて
功名手柄を聞く毎に
心勇みて氣も猛く
盡て手柄得てしかなど
いさまぬこところなかけり
賜はるかたみの色々も
只吾父の常々に
劔を得つゝ出るには

腰にほきつゝ寐るには
ラインの河の邊りなる

枕べ近くかけおけり
ピンゲン村のわが家に

其四

又わが姉に語りてよ
なげくべきにはあちねかし
賊亡びつゝ世の中の
勝戦して勇しく
われ其中にあらぬをば
父の娘よ己が姉よ
花のかんばせ麗しく
なが弟は勇しく
もし又隊の其中に
戀のかけ橋ふみかへし
かまへていら給ふなよ
父のかたみの此劔
わがなき後は其昔
常の處に置きしごと
ラインの河のほとりなる

討死にするは身のまれ
かならず悲み嘆くまじ
治る時に吾隊の
ふるさとをきて歸る時
悲しかるべしなから
みんの振まいあらまじ
わが軍隊を迎へてかし
御國の爲に戦死せり
頼しき人ありもせば
なが弟をたづねてよ
かまへて嫌ひたまはしな
これをうなに贈るなり
世にありし時ある里の
わが家の壁に掛けてしよ
ピンゲン村の吾家の

其五

又かの君に傳へてよ
 年に二八かにくからず
 吾たらちめもはらかも
 あゝ思ほへばなつみや
 互に戀ひつ慕ひつ
 慕ひこそすれ慕ひつ
 花にはさそふ春の風
 たのしき日月過ぎ行きて
 歸らぬ人となりぬれば
 これを思へば今更に
 今より後はひたすらに
 峯のあなただの來るは
 月の升らんそれまでか
 あゝかの君に語りてよ
 昔がたりのいろくを
 ラインの河のほとり

其六

目もはるくと限なく
 白き布かもライン河
 流に鳥の影すなり
 聲遠々に聞ゆるは
 我身はに彼の君と
 あるは小舟に鱸をおして
 ふしもあはに彼の君の
 嘯りかはす百鳥の
 あるは河岸を浴ひ行きて
 その美しきれもさしは
 つみてたの野の花の
 調おもしろく彼の君と
 たのしき歌の夕かせに
 手をとりあふて語り
 ひれもすたのしくあぐれし
 ラインの河のほとり

わが姉にてはらぬかし
 思ひ思はる 其中を
 君もぞぞ知りぬらむ
 吾ふるさともし日は
 慕はるゝ身は又更に
 相見ぬてなかりしを
 月には隈もつ時雨雲
 故郷遠く出陣し
 いかに嘆かむかの人は
 逢はぬ昔の戀しけれ
 我を悲しむ人なりき
 月の升るにまもあらじ
 我たまのをの止るは
 よんべの夢にかの君と
 いともたのしく語り
 吾古さとのビンゲンに

廣き野原をうねりつ
 岸に百花咲き匂ひ
 流の音が松風か
 夢かまことかうかや
 手をとりあふて伴ひつ
 清き流をこぎ行けば
 歌ふ色音は河岸に
 聲も遙かに劣るなり
 遠く山森見わたせる
 二人其處此處あくがれて
 色香も遙に劣るなり
 祖國の歌をうたひつ
 聲いと遠く聞ゆらむ
 なれし野の路其處此處
 あゝいとしきの君と
 ビンゲン村のふるさと

其七

語りして今ははや

臨終近くなりにつけり

聲はしはがり細りつゝ
息たへ〜にせまり
さらばとばかり一聲に
今一言と戦友は
ひなしき殻は草むらに
悲しきかなと地に伏し
死なば死なんと誓ひに
鎧の袖をまぼりあへず
ねりし月も星の端に
雁の一ひれかすへ見て
招く尾花の影させて
ほどりにもゆる螢火の
なきがら照し影げ白く
ラインの河の遼りなる

○年祭教育歌

握る手ささも力なく
みたる目もとの細々と
あはれはかなくなりにせり
れし動せどうつせみの
臥し横り聲もなし
天を仰ぎつゝもろとも
取残されえを嘆きつゝ
しはしは起も得りけり
横ふくにもをれきだ
吹くる夜風そよ〜と
血鹽まみれし無體の
まよへる魂の色青し
ひかり隈なき空のほき
ピンゲン村に榮るかも

●二月

としは一年十二月げつ
曆にのせてあるなかに
儀式のはじめ四方拜

その月をどにある事は
一月一日元旦は
日本こう帝わが天子

天地四方をはいしまし
それがつぎ〜文武官
市まち村さと日の丸の
大陽れきのばんこくわ
一月三日わ元始祭
かしてごころの神殿に
御祖先はじめ由來ある
五日はしんねん宴會と
招きて祝宴はりたまふ
互に慶賀をのぶるなり

●二月

二月四日はしんねん祭
年の豊饒をいのりまし
わかち給へる古例なり
明治の御代々敷ふれば
そのかみ其上に神武帝
その日を今も祝ひます
大日の本のうごきなき

世の幸いをいのります
としの朝拜にぎはしく
國旗を天にひるがへし
同くけふをを祝ひける
天皇陛下 内宮の
天神地祇と御代々々の
その神々をまつりまし
内外きけんを宮中に
このころ世間をしなて

これは日の本上古より
大社々々に幣帛を
十一日わ紀元せつ
二千五百のとしをへし
大和の國は御即位の
一年一度の御大禮
高位てくたいをく方の

末の御代までつきくに
重き祝ひ日この日なり

●三月

三月春季の皇靈さ
御代だいくの重天皇
あづかり給はぬ御靈迄
二季のなかばにある祭

祝ひ祭らせたまふべき

これは三月九日にて
その式年のみまつりに
祭らせたまひて春秋の

●四月

四月三日は神武帝
いわれ彦てふ大さむの
崩御の日なれば年毎に
敬禮祭儀をつとめけり

御代の大御名神やまど
のちのをくり名神武帝
天下こそりて實情の

●五月

五月このつき十四日
出雲大社はこのくにを
るの前くにのあるじ
地神のあるじと崇きて
ちざりて祭をなすとぞ

出雲大社のまつりなり
天孫天祖のしろしめす
いはれは遠く長けれど
天皇萬民もろどもに

●六月

六月二十一日は
あつたのみやは天皇の
寶劍てゝにといまり

尾張の熱田の祭りなり
三種の神器のその一つ
まします宮居の祭なり

●七月

七月今月十二日
祭事を行ふことをかし
天子の御難に奔走して
日本臣子のかいみとて

湊川なる楠公の
楠公くすの木正しげは
その身をすてし忠節は
祭らせ給へるとぞかし

●八月

八月四日は北野なる
てんまん宮は管はらの
時の大臣あどよりの
をもく公わ我くにの
そのとき開化の漢學と
人にすぐれし英さいの
誰もあふけるとならん

天満宮のございにち
道真公ともうしたる
文事の神とぞ仰ぎける
固いうの尊王赤心と
あはせて國の用となし
其とく萬世にかいや

●九月

九月秋季の皇靈祭は

●十月

十月伊勢の神宮の

伊勢神宮内宮は

三種の神器のその一の

その別殿の外宮には

年中一度のをまつりは

●十一月

十一月の三日をば

これわすなはち當今の

天下たのしき日なりけり

二十三日は新嘗ささい

天神地祇をかん請し

古式をたがへず年々に

供へまつらす神じなり

古式今式とりどりに

換ふべき物と換まじき

改良進歩をはかりゆく

とは三月のごとくなり

神嘗祭のまつりなり

天照します大神と

神鏡とくにじつまりて

豊受大神をはします

就せぬみかどの御尊信

天長節をぞいわひける

天皇陛下の御産れ日

これはみかどの宮中に

其式悉とく古れいにて

としの新穀その初つ穂

古今世の中世のことは

用ひてわたれる其中の

物を見わけてつきくに

道理は人のみちぞかし

ちれを盡して月々に

もどむにむく時あり

●十二月

十二月は年のすゑの月

これ六月のをわりにも

をもくこゝに年中の

人のたいじはよの中の

親と教師のちからにて

をのくなん女一人の

ちから次第に家をもち

つもりて其世をよ様々

人のほめさせ稱美させ

尊信せられてわが國の

日の本日の九日本じん

事物のはん榮その中を

忠孝みがき千萬年

をこたらぬこそ人の道

日本太祖の皇帝の

としの終りの大はらへ

行ひきたれる古禮なり

行事の大事を申さんに

誰もことごとく幼な

つきく成長成人し

わざをつとむる時至れ

國益進歩のたすけをし

その國其地をよく國と

海外諸國の人にまで

國旗の光をかゝやかし

にほん帝位大帝位

これの住家を定めつゝ

年中時々のたまひを

西に英吉利北に魯西亞
をもてに語ふ條やくも
萬國公法ありとても
強弱にくをわらそふわ
嗚呼とら胞の兄ていよ
つくせやはげめ諸共に

○護身の歌

あだにすぐすな今日を
むだにくらすな此年を
學の庭につとふ子よら

○父母の恩歌

父母兄弟うちつとひ
錦まとふて歸らんと
立て故郷を後にみて
あなたこなたの國々の
學びの海に浮沈み
こゝに三年の旅まくら
さぞ故郷の母ごころ

油だんな爲せを國の人
こゝる底は、かられず
いざことあらば腕力の
覺悟のまへの事なるぞ
御國に生し甲斐あらば
眞心こめてつくすべし

今日は再びかへりこず
今年は復へめぐりこず
たもますつとめや教訓

しんるい友朋指きよせ
訣別の宴に誓ひごと
門出でなせし以來は
文の林にやどりつゝ
過し月日もいと早やく
さぞ故郷の父ごころ
思へば袖も濕るらん

山より高き父の恩

此恩如何で忘るべき
たとへ山丘崩るども
我魂の緒のつら成て
さはさり乍ら今はまだ
空しく歸る時ならず
父と母との名をけがす
ましてひじりの教にも
孝の終りと聞つるを
かくと思へば殊更に
長閑けき心なかりけり
雪に螢に苦を積て
父母兄弟うちつとひ
學びの寶の身に付て
庭にさかゆる常盤木も
清水に住める狸跡も

○見訓の歌

幼なきよりなるどもに

海より深き母の恩

此恩愛いかで忘るべき
たとへ海川涸ゝども
絶へぬ限りは忘れまじ
一つの事さへなし遂げ
こゝろの耻は忍ぶども
人の唾笑を忍ぶべき
父母の名揚げし其時は
如何で空しく歸るべか
月雪花の眺にも
勉つ勵みつ撓ますに
事なし果て、歸る日は
親類朋友招き寄
見へぬ錦やかややかん
爲に縁を指ならん
爲にいき―跳るらん

ろく々月日を費やさず

はやく學校へ通ふべし
譽のなきけはじなれば
とくと學問ははげみよ
利へきの仕事に志ざし
類なき功業たてなせよ
俄まゝ氣まゝの事なす
能く孝行をつくすべし
れいをつくして挨拶し
つねしつかふ言葉
何程危き場所にても
無理を聞ても腹立たず
居どころなどは飾すに
おのれ何程まづしきも
やがて榮ゆる者ぞかし
げい能あらば用ゐられ
あとをなすにも人毎に
ていぬいにして早せよ
先はあとへとすべからず

人間こそは生れても
平生みもちを慎しみて
知悉と行作も習ひへて
ぬけずたゆまぬ心もて
をんな男子の別ちなく
兼々親兄弟をいせつに
他人や親類教師へは
粗忽の扱ひなすなかれ
ねんごろなるが専一ど
乱暴はたらく事なかれ
うそは必らず謹しめよ
飲食みたりになすな
苦みいとはす勉めなば
増して賤しき人にても
無技倆なれば捨られん
得てと不得ては有るぞ
明日の事をば今日して
着物わなる丈大切つに

浴湯はなる式的怠らず
身のうんどうを怠るな
榮耀榮花は身にあまり
百年千年に名を揚げん
未々富貴とならんには

飯は食する時をさだめ
種々の事に氣をつけば
人々とわれを敬まひて
世けん幼き諸どもよ
教育うけてをこたるな

明治廿七年三月三日印刷
明治廿七年四月十五日發行



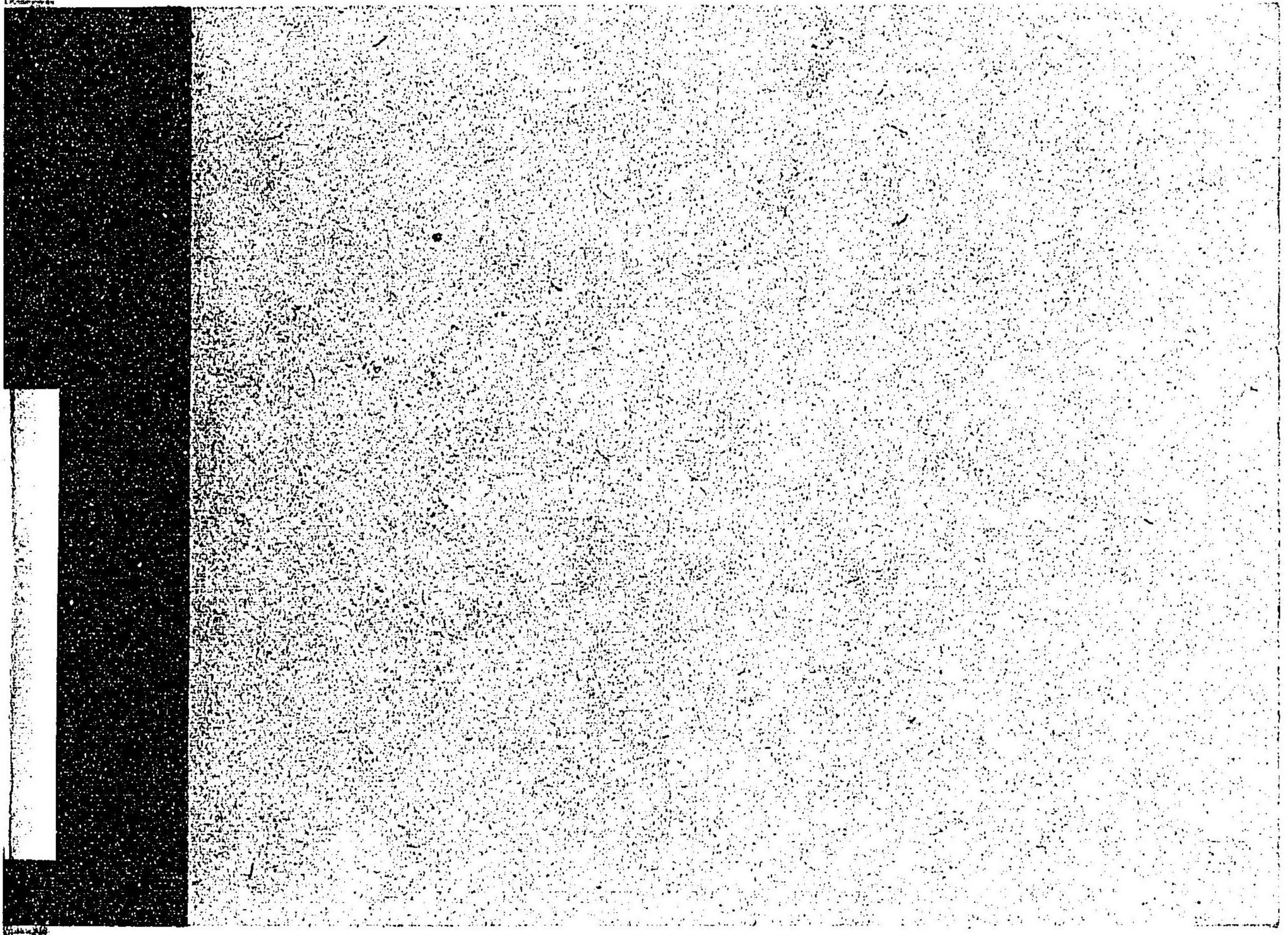
東京淺草區小島町十番地
發行者 山崎曉三郎

東京神田區柳原河岸第十一號地
印刷者 大場沃美

特約
關東大賣捌書店

兩國吉川町	大黒屋平吉
淺草三好町	大川屋礎吉
馬喰町貳	山口屋藤兵衛
通り三丁目	内藤金櫻堂
本石町	上田屋本店
横山町三	辻岡屋文助
小傳町	近江屋園吉
馬喰町	澤久次郎
同所	網島龜吉
同所	木屋宗四郎
瓦町	森本順三郎





特51

139

軍歌集

国立国会図書館

072980-000-3

特51-139

軍歌集 (学生必唱)

国華堂

M27

CEH-0518

